# 俺の成り上がり記

貫之２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の成り上がり記

【Ｎコード】
Ｎ４８２６Ｗ

【作者名】
貫之２

【あらすじ】
気付いたらコボルトになっていた。主人公
自分より格上の魔物を倒せば、進化し強い魔物になれると知った主人公は、最強の魔物を目指し、強かに危険な森で生きていく……
最終的には、主人公最強、ハーレムになる予定です。
処女作です。文書、物語のテンポ等、稚拙な部分が数多くありますがご了承ください。

## 序章（前書き）

閲覧ありがとうございます　これからよろしくお願いします（o＊。
―。）oペコッ

# 序章

あ、ありのままの今起こった事を話すぜ。ベッドで寝ていたらコボルトに成っていった。な、何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった。
頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえもっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

「一体どうなってやがるんだ……」

昨日いつも通り、大学から帰り家でごろごろし、そのままベッドで寝ていたはずだ。漫画、小説の様に変なものを潜った訳でもなければ、死んで転生したわけでもない。一体何が起こったのであろうかまったく想像がつかない。

何はともあれ、現状を確認しよう。居る場所は洞窟であろうか、見渡す限り石で囲まれている。そして俺自身は人間ではないようである。手を見ると年老いた人間の手の様に細く長く皺だらけの手。肌の色も肌色ではあるが黒ずんで気味が悪い。自分の顔は見れないが、周りにいる生物達と同じ顔をしているのだろう、尖った耳、少し長く伸びた鼻、年老いた老婆をさらに醜く皺くちゃに歪ませた顔。醜い、気持ち悪いとしか言いようがない。

俺自身、周りのいる生物の名前はコボルトであるようだ。何故わかったかと言えば、周りにいるコボルトを見た瞬間頭に

『コボルト』

と浮かんだからである。生物を見ればその生物の名前が浮かんでくるのであろうと考えられる。洞窟内ではコボルト以外見受けられないので、確証があるわけでは無い。どうやら俺は生まれて間もないらしく、立って動くことがない。此処は俺の様に生まれたばかりのコボルトを集めるような部屋であるらしい、そして俺らの世話するようである大人のコボルトが数匹、忙しく動いている。

現状を確認していると一匹のコボルトが目の前に現れ、木の葉に乗せた大きな芋虫を置いてきた。まさかこれが餌なのかと思い、周りを見渡すが同じ芋虫が餌な奴も入れば、木の実や果実の奴もいた。

（最悪だ……こんなもの食べれるか！！）

葉の上の芋虫は生きており、まだうねうね動いている。何故よりにもよって芋虫なんだよ！！

まだうまく喋ることも出来ないので交換を頼むことも出来ない。つまりこれしか食べる物は無い。葛藤の末、生きる為に食べることを決意した。

（南無三！！）

目を瞑り一口で芋虫を頬張る。

（う、うまい！？）

正直旨かった。恐らくコボルトに成ったため味覚も変わった為であろう。どうやら食べ物がまずくて食えずに死ぬということは避けそうでられそうであった。

それから1時間も経たずに俺達子供コボルト達は自力で立てるようになっていた。

（まるで馬やヤギみたいだな……）

大人に成長するまではこの安全な洞窟内で生活して情報を集めて行こう、そんなことを考えていた自分が如何に甘かったか直ぐに痛感することになる……

「餌取ってこい。取れるまで帰ってくるな」

告げられたのはその一言だけであった。たったそれだけを言い残し大人コボルトは、無知識、無装備の俺らを危険な外へと放りだしたのだった……

恐らくというよりは、ほぼ確信的なものだが、俺達コボルトはこの世界でかなりの弱者になるのだろう。俺の今の身長は１１０？ぐらいであり、大人のコボルトを見ても１３０？ぐらいなのである。近くにある大き目の石を持ってみたが、人間の頃と比べはるかに重く感じる。筋力も人間以下なのだろう。そして、この洞窟の外には、恐ろしい敵がわんさかいる可能性がある。いやそうなのであろう。

「何はともあれ探すしかない……か」

放り出された子供コボルトは俺を含め約２０匹。優先すべきは餌を見つける事よりは生き残る事。こんな所で死ぬつもりはなければ死にたくもない。現状で生き残る為に必要になってくるのは、武器で無く情報だ。どんな敵がいるのか全く分からないのだ自分より強い敵、弱い敵を見極める必要がある。つまりだ、一番先に餌を探しに行くのは蛮勇でしかない。俺は２０匹中一番最後に出発することに

した。

これだけ広い森なのだ、芋虫のような生き物は幾らでもいるだろう。洞窟の近場でとって直ぐに帰れば死ぬことはないだろうと思っていた。直ぐにその考えを改めることになるとも知らずに……

探し始めて5分ほど経った。全員、何人か集まって探すのではなく完全に個々で餌を探していた。位置は洞窟から出てまだ１００ｍぐらいである。その辺りの草をかき分け芋虫を探したりしているが、元都会っ子である俺が芋虫がどういう所にいるなど検討も付かず収穫は今だ０であった。どうやら他の奴らも見つけていないようである。若干苛立ちながら探していると

「見つけたーーー！！」

仲間の一人が何かを見つけ叫んだ。その叫び声の方に向かってみると、木に大きな木の実がいくつも並んでいた。叫び声に釣られる様に他のコボルト達も集まってきた。そして俺も含め周りの奴らも歓喜した。これで洞窟に帰れると。

木の実を見つけたコボルトがまず先にと木に登って行った。登りきり木の枝に跨って木の実を取ろうとした瞬間！！

「ぎゃあああああああああああああああああああ」

巨大なクモに襲われた。

『ビックスパイダー』

と頭に浮かんできた。まさに名前の通りでかい。地球上のどの蜘蛛

より圧倒的にでかい、５０?ほどの巨大なクモである。足の長さを入れれば１mはあるだろう。木の上の部分にうまく身を隠していたのだろうまったく気付く事が出来なかった。襲われたコボルトは必死に暴れたが、前足でがっちりと捕まえられ、逃げることが出来ず、最後に一度ビクンと体を震わせて動かなくなった。体に毒が回ったのだろう。そしてビックスパイダーは捕まえたコボルトを持って木の上に戻っていった……

（冗談じゃねぇぞ！?）

蜘蛛でさえこんなでかい生き物が存在するのだ、他かにもっと恐ろしいのがどこかに潜んでいる可能性が大いにある。ほんのちょっとの油断が命取りになるのだ、さらに警戒して辺りを探し始めた。

しかし、俺の恐怖をさらに煽るような出来事が次々に起こっていく。草むらを探そうと近づいた一匹が、巨大なカマキリに捕まり捕食され、コボルトと同じ大きさのスライムが現れ、コボルトに伸し掛かり生きたまま消化していった。これ以外でも俺が確認できなった悲鳴を合わせればかなりの数のコボルトが食われている。そんな中俺はいつ食われるかの恐怖と闘いながらなんとか、芋虫など数匹見つけることが出来た。

（これで、帰れる……）

これで帰ると安心したが、これで気を緩めるわけにはいかない。洞窟までたった３００mだがそれだけ進むのにかなりの仲間がやられているのだ、いつ襲われるか分からないのだ……

命からがらに何とか洞窟に戻ってくることが出来た。俺以外の仲間も数匹は戻ってきているようである。俺は精根尽き果て、壁に寄り

かかりこの日の残りをぐったりして過ごしたのであった。そして今日この日帰ってきた仲間は、俺を含め１１匹であった……

翌日、昨日生き残った１１匹の仲間たちは、大きい部屋に集められていた。そこの部屋にいたのは１５０?ほどの大きなコボルトの老人であった。その老コボルトを見ると

『ハイ・コボルト』

頭に浮かんできた。どうやらコボルトの上位体な存在なのだろう。

「若きコボルト達よよくぞ生き残った。お主らに、教えておくことがある。お主らは昨日恐ろしい敵にあっただろう?」

老コボルトの言葉に全員頷く。

「奴らは皆、ワシ等の天敵であるが、またワシ等の成長の糧となるのだ。奴らを一匹でも倒せたら、ワシと同じ進化を遂げることが出来るじゃろう。奴らを倒し、ワシと同じ者がこの中から現れる事を祈ってるよ」

とだけ言い残し、老コボルトは部屋を出ていった。

（あの化け物共を一匹でも倒せれば、進化できるのか……）

言うだけであるなら簡単である。昨日の化け物達との遭遇でそれがどれほど難しいか理解している。だがやらなければ、毎回あの化け物に殺される恐怖を味わう事になるのだ。

（チャンスがあればだ。生き残ることを優先しよう……）

そう決意し、今日の餌取りへと出掛けさせられた。

今日は、どうやら大人コボルト達と餌取りに行くようである。というより、朝方に歩くことが出来るようになったコボルトを餌取りに出掛けさせ、昼過ぎ辺りに最初の餌取りを生き残ることが出来たものの含め、大人コボルト達と餌取りに出かけるようである。総勢約６０匹の大部隊である。基本、餌取りに出かけるのはオスのみである。メスは基本洞窟内でひたすら、孕ませられ、子を産ませられている。

（餌を探しつつなにかしら武器になりそうなものを探そう）

辺りの大人コボルトを見てみると中にも木の棒で武装している者も見受けられる。やはり、なにかしら武器のようなものを持っていた方が生存率が高いのかもしれない。しばらく辺りを捜索し何とか、餌と武器になりそうなものを見つけることが出来た。武器なるといっても先端がとがった唯の木の枝である。長さは８０？ほどであり、振り回したりは出来ないが、槍みたいに突くことは出来そうである。

今日の必要分の餌を取り、洞窟内に戻ろうとしてる時に、昨日ビックスパイダーが居た木の下に俺と同じ様に長い木の枝を持った大人コボルトが居た。どうやら上るのは危険だと知っているようで、下から木の枝で木の実を落とそうとしてるようだ。もし成功するようなら俺も明日からやろうと思い、経過を見ることにしたのだが、どうやらうまくいきそうである。枝の重みでふらふらしながらなんとか木の枝を操り、木のみを数個落とすことに成功していた。木の実を落とす事に成功し嬉しそうに拾う、大人コボルトであったが、悲劇に見舞われることになった。

「ぐぎゃあああああああ」

木の実を拾っているコボルトに木の上から飛び降りるように、ビックスパイダーが襲ってきたのだ。俯せに伸し掛かられるを辛うじて免れなんとか仰向け状態で、ビックスパイダーの顔を抑えなんとか噛まれるのを防いでいるが、力尽きて噛まれるのも時間の問題であろう。俺にとって幸いなのは、ビックスパイダーが此方を襲ってくる気配がないことである。

（まてよ、これはチャンスではないのか……？）

ビックスパイダーとの距離は約１０ｍであるが、相手は全く此方に意識がない。恐らく此方の初撃は確実に当たるだろう。一撃で倒す事が出来れば俺は進化することが出来るかもしれない。だが逆に失敗すれば俺の命も危ない……

（よし！やるぞ！！殺ってやる！！）

躊躇している時間は無い。俺は深呼吸をし呼吸を整え、ビックスパイダーに向かって走りだした

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

俺は雄叫びと共に、渾身の力を籠めて木の枝をビックスパイダーの頭に突き刺した！！

「ピギィィィィィィィィ」

悲鳴と共に俺から逃げるように数歩、歩きそしてバタリと倒れ動かなくなった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺は吠えた。倒せた歓喜を周りにアピールするかように、空に向かって吠えた。そしてその歓喜に呼応するかのように体に力が漲ってくるのを感じる。雄叫びを終える頃には俺の体の進化が終わっていた。

老コボルトが言っていたように、俺はハイ・コボルトになった様である。体の大きさも１５０？ぐらいになったが他に外観的進化は無いようで、ただ大きくなっただけある。だが身体的には大きく進化しており、かなり重く感じていたこの木の枝も片手で軽々振り回せるようになった。そして何より知識が増えたのである。コボルトの進化先、詳しい進化の条件や見たことのない魔物の知識を得ることが出来たのである。

知識の整理を後回しにした俺は、木の実を大量に採り洞窟へと戻った。戻った先で仲間に驚かれ、祝福された。祝福が落ち着いた所で知識の確認をした。進化の条件としては自分より格上の相手を倒した場合、自分と同格の相手を数多く倒した場合であるらしい。効率よく進化するなら、危険だが自分より格上の相手を狙っていった方が良いみたいである。

またこのコボルトという種族はやはりと言うべきか、最弱の種族であった。クラスは下から、コボルト、ハイ・コボルト、コボルト・ロードとなり、ロードの進化先はゴブリンであるようだ。ゴブリンにも同様なクラスがあり、その上にオークと言われる種族がいるようだ。これ以上の種族については分からないが、進化していけば分かるのだろう。

これ等の知識は俺に希望と一つの野望を持たせることになった。進

化さえできれば、最弱のコボルトを脱することが出来、コボルトで一生過ごすということが避けられるという希望。そして絶対的な強者になるという野望だ。最強になり、自由気ままに生きる自分の姿を想像し、俺は眠りに付いた。

# 第2話

俺がハイ・コボルトになってから一週間が過ぎ、俺の状況がだいぶ変わった。まず、俺の地位である。老コボルトを抜かしてこの洞窟内のハイ・コボルトは俺だけな為、老コボルトに次いで第二位の権力を持った。それにより周りのコボルトが俺にだいぶ気を使うようになり、餌も優先的にいい物が食えるようになった。

がしかし、偉くなった事で面倒な事が起こってしまった。それはメスコボルトを抱けと老コボルトに言われる様になったことである。コボルトは、毎日のように多く誕生し、その分死んでく状況である。その為、コボルトの生存率を上げる為に強い者の遺伝子を取り入れる必要があるらしい。

勿論、その話は蹴った。女と言っても所詮はコボルトである為、醜いのだ、抱きたくない。だがそんなこと言える訳もないので、老コボルトには体力を使うから餌取りに影響が出ると言って断っている。

だが、毎日、会う度に同じことを言ってくるのにうんざりしたので、他のコボルトを進化させようとビックスパイダーをなんとか瀕死の状態にしコボルトに止めを刺させたのだが進化しなかった。

理由を老コボルトに尋ねた。どうやら進化するのに経験値が必要らしい。相手の強さ、相手の状態により取得できる経験値が違うらしい。俺は元気な奴を一発だったから進化に必要な経験値を稼げたらしいが、瀕死な状態の奴を倒したとしても経験値は殆ど手に入らないそうだ。むしろ瀕死に追い込んだ俺の方が経験値を得ているらしい。

ならば、俺が倒し方を伝授し倒させようとしたが、コボルトの理解力は猿以下じゃないかと思ってしまうぐらい悪くそれも出来なかった。結局諦め、老コボルトのせっつきを毎日聞く羽目になってしまった。

餌取りも進化してから内容が変わった。俺を含め、年長組の仕事は餌を探すのではなく水汲みだ。何故俺や年長組が任されてるかと云えば、一番危険であり一番必要とされる物であるからだ。川まで約１．５?もの距離があり、その分危険な生物に出会う可能性が高いのである。また水は、生物が生きる為に必要な物である。餌は二～三日食べなくてもなんとかなるが水はそうもいかない二日もあれば水分不足で死んでしまうのである。

水汲み部隊は俺を含め２１名で出かける。水は巨木の倒れ木を切り取り中をくり抜いた物に入れ、数は１０個あり２人係で運ぶ。俺はその道中の護衛である。行きは比較的安全なのだが、川に着けば川に俺達の様に水を求めやってくる生物に会う危険性。帰り道は水を運んでいる為、移動も遅く無防備になるので襲われる可能性が大きく上がり危険となる。

水汲みが終わった後は、水汲み部隊のほぼ全員はメスと交尾にしに行く。これは水汲み部隊の仕事でもあり、褒美になっているようである。勿論俺は行かないが。その間俺は周りの探索をしている。これは仕事ではなく自分の為である。

この一週間の探索で、一つの成果を得ることが出来た。それはゴブリンの発見である。ゴブリンは全身緑色、顔はコボルトの鼻が短くなった程度の差であり醜かった。体の大きさは俺と同じぐらいである。

この発見したゴブリンは毎回だいたい同じ時間、同じ場所に来る。恐らくこのゴブリンも餌を探しているのだろう。しかも都合のいいことに毎回一人で探索に来ている。チャンスであるのだろうが、真正面から挑んだら１００％負けるであろう。一つランク上の種族なのだ、コボルトからハイ・コボルトに進化した時の強さの上り様を考えると赤子と大人並みの力の差があってもおかしくはない。

どの様に倒すか悩んだ末俺は罠を仕掛けることにした。罠は落とし穴である。俺は落とし穴を三日ほど何かに襲われる恐怖と闘いながら俺がすっぽり入る巨大な落とし穴を作った。

この落とし穴作戦には大きな欠点があった。それは日数をかけたことである。ゴブリンが通る辺りに作った為、制作中の穴を見られてしまったのである。見た感じゴブリンもあまり頭が良さそうでは無い為問題はなさそうであるが。やはり大きな不安要素である。

罠実行当日、俺は水汲みが終わって急いで落とし穴に向かい、落とし穴、草土木を乗せ穴を塞ぐ。そして安全を確認した木の上でひっそりと待つ。そしてゴブリンがやってきた。

幸いゴブリンが来るまでに、他の生物が引っ掛からなかった。どうやらゴブリンは昨日まであった大穴が無くなってることに気付いていないようである。あとは引っ掛かるのを待つだけだ。

ゴブリンは探索しながらだんだん罠の方に近づいて来て、遂に罠に落ちた！！

「来たあああああ！！」

俺は歓喜の声上げ、直ぐさま木から飛び降り、同じ木に立てかけて

あった木の枝を手に取り急いで落とし穴へと向かう。そして俺は驚き穴から這い出そうとしているゴブリンに向かって思いっきり木の枝を振り下ろした。

「がああああぎょおおおおうあああああああああぎいいい」

悲鳴を上げるゴブリンに向かって俺は容赦なく何回も突き刺した。

「ぎぃ、きぃぃ……」

ゴブリンの悲鳴が小さくなっていく。そして動かなくなった……

「おっ、おおおおおおおおおおおおおお！！」

ゴブリンが動かなくなったと同時に俺の体に力が漲ってくるのを感じる。そして肌の色が変わって行き俺はゴブリンに進化した。

「これがゴブリンの体か……」

ゴブリンになって筋力はもちろん、聴力が大きく上がった気がする。遠くの物音まではっきり聞こえるようになった。知識も得たのだがその確認は後回しに、俺は嬉々として帰路に着いたのであった。

俺が洞窟に近づくにつれ大人コボルトが多く出て来た。俺は皆で俺を祝福してくれる為に出てくれるのかと喜びを感じながら近づいて行った。だがそんな俺に飛んで来たのは、

「痛っ！？」

祝福の言葉ではなく石であった。そこで俺は初めて俺に向けられて

いる敵意に気付いた。そう俺を祝いに皆出て来たのではない、追い払いに出て来たことに。俺は直ぐに自分がゴブリンになった所為だと気付き、説明するが理解出来ていないのか、または信じて貰えないのか俺に対する敵意が無くならなかった。老コボルトなら理解してくれると思い、呼ぶように言ってみたが話は通じなかった。そして俺は説得を諦め洞窟から去った。

俺は進化をし、大きな力を手に入れた代わりに仲間と住処を失うことになってしまった……

その夜俺は木の上で恐怖に震えていた。夜に外にいることは初めてであり、昼間は居ない危険な生物が居るかもしれないのだ。しかも寝てしまえばその間に襲われるかもしれない為、眠ることができない。仲間が居て、安心して眠ることが出来たあの洞窟が如何に大切な場所だったか思い知ることになった。結局俺は一睡も出来ぬまま一夜を空けることになった。

早朝、俺は朝日が差すと同時に活動を始めた。まずはねぐら探しである。昨日も追い出された後、日が落ちるまで探したのだがいい場所は見つけれなかった。俺は行ったことのない所を中心に探すことにした。その為慎重に進まなければならなかったので思ったより調べる事が出来なかった。運よくねぐらを見つけられたのはもう日が落ち始めた頃であった。

見つけた所は小さな洞穴であった。入口の大きさは俺がなんとか入れるぐらいの大きさであるが、中は思ったより広く畳2畳分ぐらいの広さはありそうだ。他の生き物が住んでいる痕跡も無いので此処を住処にすることにし、寝所作りを始めた。背の高い枝木を集めそれを蔓でまとめ、洞穴の入口を塞ぐようにたて掛けた。完全に塞ぐ訳でなく外の様子を見れる様に上の部分は開けてある、これで外か

ら俺を見つけられる心配、侵入してくるものが来たらそれをどかす音で俺が起きることが出来る。

このねぐらが完成すると強烈な眠気に襲われた俺は、日が落ちるのを待たずにぐっすりと眠った。

## 第2話（後書き）

一章の間ほとんど主人公の一人称だけで物語が進んでいきます。説明文が多くなりますがご了承ください（o＊。＿。）oペコッ

# 第3話

ぐっすりと睡眠が出来た俺はいつもの如く探索に出かけた。これからの当面の目標は次なる進化先のオーク探しとゴブリンの集落探しだ。洞窟を追い出されて1人の辛さを知った俺はゴブリンの集落に入れて貰おうと考えていた。ゴブリンに進化したおかげでスライムや巨大昆虫系の魔物相手なら苦も無く倒せるようになっていたが、夜の安全面を考えると仲間が欲しいのだ。

この世界に来てだいぶ経って分かった事だが、この森にコボルトやゴブリンのような人型の魔物以外はすべて昆虫系の魔物しか居ないのだ。熊や鹿のような大型の動物や小型のウサギやネズミすら見当たらない。おかげで、ここに来て肉を全く食べていない。食べてるのは果実や芋虫だけな為いい加減肉を食べたい。

更に贅沢を言えば、塩、醤油のような調味料でしっかりと味付けされた料理が食べたい。ふっくら炊いたお米、ハンバーグ、味噌汁、カレー、地球で何気なく食べていた物が恋しくて仕方がない。脳内で味を思い出しながら探索していると何かの物音を感じた。

物音の感じからどうやら複数居るようである。音を立てない様にゆっくりと近づいて行くと三体のゴブリンを発見した。あちらも此方の近づいてくる音を感知していたようで、此方の方を窺っているがどうやら気付かれてはいないようだ。

3体の内1体は、ハイ・ゴブリンであった。そして何より俺を驚かせたのはそのハイ・ゴブリンが持っていた物であった。ハイ・ゴブリンは直剣を持っていたのだ。持っている直剣は刃は欠けボロボロである、恐らく奪ったか拾った物であろうがそんな事はどうでも良

かった。重要なのはこの世界に直剣があるという事である。

つまり、人間または人間に準ずる文明を持った存在が居るということの証明に他ならない。俺は歓喜を抑えらず笑みを溢してしまった。進化していった先は、人間または高度な文明を持った種族に成れるかもしれないのだ。俄然気力が湧いてきた。

この3体は辺りの果実などを回収すると移動し始めた。俺はそのあとを着いて行き、辿り着いたのはゴブリンの集落であった。俺は少し集落から離れた背の高い木に登り、上から観察することにした。

集落に居るゴブリンは、約１００体近くは居るだろう。コボルトの様に洞窟に住んでいるわけでは無く、森の中に固まっているだけという感じである。寝床は恐らく辺りに数多く見られる枯葉などを集めてある場所がそうなのであろう。また木を切り倒し並べその上に取ってきた大量の果実など食料が置いてある、倉庫と言った所であろう。

この集落には、ハイ・ゴブリンが数体、そして他のゴブリンより一回り大きいゴブリンロードが居た。こいつが此処のボスなのだろう。集落は思った以上に広く、木々を移動しながら観察していたのだが、俺は枯葉の寝床に横たわるものを見てこの世界に来て一番の驚きを得ることになった。

横たわっていたのは人間の女性だったのだ！！

服は着ておらず、裸であった。腹が膨れていたので恐らくゴブリンに犯され孕まされているのだろう。

「ついに見つけた！！」

念願の人発見である。これで進化していけば人間になれる可能性が一気に上がった、俺は歓喜に震える体を抑え観察を続けた。捕まってる人間は1人だけであるようだ。何らかの理由で連れ去られたのだろう。

1人だけであるとこを見ると1人でいる所を運悪く捕まってしまったのだろう。ゴブリンが人間を連れ去れるような力があるなら、もっと捕まえられている人間が居てもおかしくはない。と言うよりは人間がゴブリンより弱いと思いたくない。

哀れだとは思うが、助け出そうとは思わない。１００人のゴブリン達を相手に勝てるわけもないし、俺自身もゴブリンなのだ、助けに来たと理解されないだろう。

その後俺は次の日の朝まで貫徹で観察を続けたのであった。

観察を終え、寝床に戻った俺は今後の作戦を考える。まず、ゴブリンの集落に入れて貰う案は却下だ。コボルトより上下関係が激しく、ロードの怒りをかってぶち殺されていたゴブリンが何体もいた、魔物に殺されてしまう前に同種であるゴブリンにやられてしまう。それに餌探しなどで探索する時間も取れなそうである。

また夜に夜襲をかけてロードだけ狙おうとも考えたが、夜にも見張りが居る為、不可能であった。残る進化の手は探索に出ているハイ・ゴブリンを狙うしかないのだが、恐らく常に3体で動いているのだろう。真正面からは当然の如く勝てないし、3体居る為、罠も効果はないだろう。

結局、いい案が浮かばずこの日は、貫徹の疲れがあったので、必要

分の食糧だけ取って1日中寝て過ごした。

1日休んで疲れはほぼ取れたが案は相変わらず浮かばなかった。とりあえず、なんらかしらの方法がないかとあの三体のコブリンの様子を観察することにした。ゴブリン達は何時もの場所に居たのだが、何か様子が変であった。

騒がしいのである。木々のせいで良く見えないが何かに向かって威嚇しているようだ。ゆっくり近づいて行くと、ゴブリン達の威嚇の先には1体のオークが居た。体長は大体人間の大人と同じぐらいの170?ぐらいで、薄いピンク色の肌に豚顔、まさに豚人間と言った風貌であった。

どうやら戦闘になるようだ。ゴブリン側は前回と同じ装備であるのに対して、オークは大きな石を木と木で挟み、それを草の蔓で固定した石斧のような物を持っていた。武器を制作している所を見るとゴブリンよりは知識があるようだ。

しかし戦闘に出会えるのはラッキーであった。俺の進化先であるオークの強さを見る事が出来、ゴブリンである俺との差が明確に分かり今後の作戦をより練りやすくなる。

どうやら戦闘が始まるようだ。先に仕掛けたのはゴブリンだった。ただのコブリンが木の棒を振りかぶりオークに叩き付けた。がしかしオークはまったくビクともせず持っていた石斧で頭を殴りつける。殴りつけられたゴブリンの頭は無残にも吹き飛び、頭を失った体がふらふらと数歩歩き、崩れ落ちるように倒れていった。

その様子を見た残りのゴブリンは、2人で襲い掛かることにしたようだ。まずただのコブリンが襲い掛かり、その後すぐに直剣を持っ

たハイ・ゴブリンが攻撃に続いた。コブリンの攻撃を囮に、直剣で止めを刺すつもりだったのだろうが、オークはゴブリンの木の棒が頭に当たったのがまるで当たってないかのようにスルーし、直剣を振り下ろそうとしたハイ・ゴブリンの腕を抑えつけ、石斧で殴りつけた。

「プギャ」

と短い悲鳴を上げ、ハイ・ゴブリンは絶命した。勝てないと知った最後の1体は、急いで逃げようとしたが、逃げる事叶わず石斧の餌食となってしまった……

「……」

俺はオークの強さに絶句してしまっていた。正直これほどの圧倒的な差があるとは思っていなかった。むしろ3対1ならば倒せるのでは？と期待もしていたのだが、結果はご覧の通りである。

俺が言葉を失っている間にオークは、ハイ・ゴブリンの死体とコブリンの死体を両肩に担ぎ立ち去ろうとしていた。ゴブリンを餌にするのであろうか？

俺は立ち去ったのを確認した後、その場に行きハイ・ゴブリンのあった場所から直剣を回収する。刃こぼれや汚れでボロボロであった。残っているゴブリンの死骸に突き刺してみたが、切れ味はもうほとんど無かったが、鉄としての十分な硬さは残っているので武器としての機能は十二分にある。

そして俺は直剣を担いでさっきのオークをぶっ殺しに追いかけていった。

何を考えている？さっきの戦いを見なかったのか？と言われそうだが俺は正気である。むしろオークを殺すのは今が絶好のチャンスなのだ。

オークの後ろ姿が見える位置まで追いついた。まだ他のオークと合流はしていない、俺は気付かれないギリギリまで近づいた。チャンスは一度きり、ミスれば命はない。

「うおおおおおおおお！！」

俺は雄叫びを上げ直剣を構え特攻する。俺の声に気付き此方に振り向こうとするオークに

「死ねえええええええええ」

渾身の突きを放った。

「ブオ……ゴボォ……」

ゴブリンを両手に持っていた為、咄嗟にガードをすることが出来ず、俺の突きを喉の突き立てられ声にならない断末魔を上げ死んだ。

「ふぅ……」

体の変化が起こり、自分がオークになったことを感じた。知識もあふれてくるがそんな事よりこの姿になったら言ってみたいセリフがあった。

「飛べない豚はただの豚だ……」

誰も居ないのに係わらずちょっとかっこつけて言ってみたのだが、無性に恥ずかしくなってその場から逃げだすように帰路についた。

後に、俺、飛べないからただの豚じゃね？と気付き凹んだのは内緒だ……

# 第４話

オークになってから一週間が過ぎた。オークになってからどう進化したのか具体的に判明した。まず身体的には、身体能力はもちろんだが嗅覚が大きく上がった。殆ど香の無い物の匂いも分かるようになったし、匂いの差異がより鮮明に分かるようになった。

さらに、今まで生き物を見るとその種族名が頭に浮かんできたのだが、それに加えて相手の強さが分かるようになった。例えば、コボルトを見るとコボルトとしか浮かんで来なかったが、今度は

『コボルト　Ｅ　』

と表示されるようになった。これはその生物の強さのランクであり、スライム、巨大昆虫、ゴブリン、オークはＤランクだった。同じランク内でも強さの差異は大きくあるように感じる。

今回の進化で一番俺を驚かしたのは、魔法の存在であった。今回、俺が覚えることが出来た魔法は発火の魔法だった。その発火の魔法使い方は知識に存在し直ぐに使え、名前の通り小さい火を生み出せるだけであった。

この発火の知識を利用して他の魔法を使えないか試したが無理であった。攻撃としてはなんら使い道のない発火の魔法だが、俺の食生活に大きな変化をもたらした。

まずは魚が食えるようになった。生では食えたものではなかったが、火を通すことによって食べることが出来るようになった。後、あまりの肉の食いたさにオークを焼いて食べてみたのだが、びっくりす

るほど旨かった。

私生活においてこの一週間でかなり向上されたが、探索の成果はいまいちであった。オークの集落の発見をすることが出来たが、ゴブリンとそう大差ないので、集落に入るのは断念し、次の進化先のオーガについても発見することが出来なかった。

どうやら俺の住処周辺には、オーク以上の種族はいないようであった。

その為、俺は一旦、オーガの探索を一旦止め、前々から考えていたことを実行に移すことにした。

それは、この森の出口の発見及び、人の発見を目指す事にしたのだ。もちろん森の出口を発見したからといって人里に出るわけでは無い。森の出口を発見できれば、人の住んでいる形跡を見れるのではないかと考えたのだ。

森を出たら人里が見えるかもしれないし、街道があるかもしれない。そうすればこの世界の人間の情報を手に入れる可能性が出来るのだ。オークに進化したおかげで、此処のハイ・オークやオークロード以外敵は居ないので依然と比べ安全に探索ができる。

そして俺は、考えを実行すべく、早朝から出発した。何時もの寝床には数日は帰って来ない、または住処を移す可能性があるので持てるだけ食料と武器を持って出かけた。まあ武器なんて直剣しかないのでほぼ食料であるが。

出発してから早三日が過ぎたが、今だ森の出口を発見することが出来ないでいた。自分の予想より遥かにでかい森であったことと、方

位磁石などの自分の進んでる方向を示す物が無い為、気付いたら逆走していたなんてこともあり、思いの外難航している。

そして今日、四日目の朝。俺は思いもしなかった事に遭遇することになった。

辺りを警戒しつつ、進んでいると今まで聞こえた事の無いような大きな足音が聞こえて来きたので、気付かれないようにゆっくりと近づいて行くとおよそ体長２ｍ前後はある赤黒い肌をした大男達が居た。

『オーガ　Ｃ　』

どうやらあれが、次の俺の進化先であるオーガであるようだ。オーガ達の数は１０体ほどの団体だった。全員、子供の胴ほどのでかい木の棍棒を持っていた。Ｃランクにもなると、木を削り武器を作る程の知性があるようである。

このオーガ達、何かを探してるというより何処かを目指しているという感じである。とりあえずオーガの生態調べも兼ねて付いて行くことにした。勿論バレたら瞬殺されるので気付かれない様細心の注意を払ってであるが。

しばらく付いて行くと、ある開けた場所にでるとピタリと止まった。何もなさそうな所であるが一体何をするのだろうと考えていると、突如

「出てこい！！」

「隠れてんじゃねぇ！」

等と急に騒ぎ出した。この騒ぎに俺は二つの意味で驚いた。一つ目は普通にいきなり騒がれたからであるが、もう一つはこのオーガ達ちゃんとした人語を操っていたことであった。

オークを含めこれまでの生物は、その種族になるまで何を言っているかまるで分からなかったのであるが、オーガの言葉は、ちゃんとした人語に聞こえる。オークなのに人語が分かるのは、俺が人間の頃の知識を持っているためであろう。

だが、異世界の人語を理解できるかは、まるで分からない。訳も分からず異世界に来てしまった事自体異常なのだ、そんなことを気にしていても仕方がない。

オーガ達が騒ぎ出してから、かなりの時間がたったが相変わらず騒いでいる。一体何が隠れているというのだろう？

そこからさらに時間が立ち、もう騒ぎ始めてから半日が過ぎ、もう日が暮れ始めた頃ようやく動きがあった。

「！？」

突如何もない所から二人の人が現れたのだ。人とまるで変わらない姿をしているのだが、耳が長く尖った耳をしている。何の種族だろうと思ってずっと見ていたのだが、一向に種族名が頭に浮かんで来ない。

魔物しか頭に浮かんで来ないのだろうと考え、容姿からエルフとか言われる種族だろうと思われる。男女のペアであったが、1人は金髪の美青年、もう1人は地球上にはない銀髪の髪を腰まで伸ばした

美しい女性であった。

「ふつくしい……」

銀髪のエルフ？の女性は俺が今まで見てきたどんな女性よりも美しかった。ＴＶに出てくるようなアイドルなどとは違い、化粧もなく飾り気のない服を着ているのにも関わらず見とれるほど美しく、凛とし、気高く気品をも感じさせた。まさしく絶世の美女という言葉が相応しいだろう。

そんな二人をエルフ？を見るやいなやオーガ達は

「やっとでてきたか！！」

「ぎゃはは、捕まえて犯してやるぜ」

「男は俺がもらうぜ、グヒヒヒ」

辺りが揺れているように感じさせられるほど騒ぎ出した。騒いでる声を聴く限り、知性のかけらもない野蛮な種族であるようだ。と言うより、オーガは恐ろしいことに男もイける種族であるらしい。なんということだ……

「まったく、オーガ如きが鬱陶しい。アル様が相手にするまでもありません。ここは僕にお任せください」

エルフ？の男が口を開いた。どうやら女性の方が偉いらしいが、お前一人で片付けるなら、お前だけで来いよと思うのは俺だけであろうか？

男は、背に担いでいた弓を手に取る、どうやら武器は弓のみであるようだがオーガとの距離は近い、数も多く弓で戦うのは不利であることは明確であるが、余裕を見るかぎり、よほど自信があるのだろう。

そして男は空に矢を放った

「は？」

俺は思わず呟いてしまった。どうやらオーガ達も同様に呆けてしまっていたが直ぐに我を取戻し

「ぎゃはははは、空に放つとはどうやら俺らにビビッちまったようだな」

「大人しくすればやさしくしてやるぜ。グヒヒヒ」

もはや勝ちを確信したように高笑いを始めたオーガ達に、空から矢が降り注いだ。

「えっ！？」

そう矢が降り注いだのである。放った矢は一本であったはずだが、無数の矢がオーガ達に雨の様に降り注いだのある。しかも一発一発の威力が大きい。振ってきた矢はオーガ達の体を貫通し、地面に深々と刺さっている。

男が矢を放って約１０秒後、さっきまで高笑いしていた１０体ほどのオーガ達は見るも無残な死体へと変貌を遂げていた。

「下種共が二度と近づいてくるな。さて、アル様戻りましょう」

どうやら戻るようである。俺は最後に銀髪の美女を目に焼き付けようと顔を見た。すると

銀髪の美女と目が合った。

「！！！！？？」

そう目が合ったのである。錯覚ではない、美女はこっちをずっと見ている。此処からは２００ｍ近く離れ尚且つ草むらに隠れている俺見つめていた。

即座に俺は逃げる体制を取った。Ｃランクの魔物を瞬殺する相手に勝てる相手に、勝つことなどできない。それどころか、逃げ切れないかもしれない。俺は流行る鼓動を抑え、少しでも此方に来るようなら即座に逃げる体制を取る。

「アル様？どうかしましたか？」

どうやら男の方には気付かれていない様であるが……

「いや、なんでもない戻ろう。ご苦労だったヴァン」

そう言って俺から視線を外し、２人は現れた時と同じようにそこにフッと姿を消した。

「はぁ～～～～～～～」

2人が消えたことを確認し俺はその場に座り込み、大きくため息をついた。正直これほど死を覚悟したことはなかった。あの美女が見逃してくれなければ、俺は今頃オーガ達の様に見るも無残な姿になっていたに違いない。

オーガ達を屠った矢の雨は恐らく魔法だろう。雨のように降ったはずの矢が消えている。

「しっかしこの世界にはあんな化け物染みた強さの奴らがいるのかよ……」

この世界の恐ろしさを改めて感じさせられた一日となった。

# 第5話

エルフと思わしき者と遭遇した後、俺は来た道を逆走していた。あんな所に居たら命がいくつあっても足りないと判断したからだ。オーガの存在発見できたあの場所から去るのは勿体ない気がしたが、命には代えられない。

あとあの事件によって俺の中にある仮説が生まれたからだ。俺の地球上でのエルフのイメージは、長い耳、魔法が人間より強い、森の奥に住み人間を避けて暮らしている、だ。出会ってみての感じ、あながち間違いではなさそうである。

つまり、エルフは森の奥の方に住んでいる可能性があるのだ。今まで進んできた方向が森の奥に進む方だったなら、逆に進めば出口があるんじゃね？という考えのもと三日かけてきた道をまっすぐ逆走しているのだ。

そして、進むこと4日ついに森の出口を発見したのだ！！

出口から外を窺って見るとそこには、村など人里らしきものは見当たらなかったが、人の通る街道らしき物があった。1週間かけてようやく見つけることが出来た。進む方向さえ間違ってなければ、1日で発見できたという事実はこの際気付かなかったことにしよう……

しばらくここで人間観察することに、この世界の人間の文明の発達などを通行人から、判断していこうと思う。幸い、元の住処から近い場所である為そこまで危険な生物も居なさそうである。

そうこうしているうちに、人間が街道を通ってるの発見した。馬車

二台に、その護衛らしく武装した人間が約６人、馬車内の人間を合わせれば８人であるようだ。

『人間　Ｄ　』

と頭に浮かんできた。

「えっＤですか……？」

次の俺の進化先は、オーガのＣランクである。つまりこれは俺が人間になれないと意味していることに他ならなかった……

次に武装した人間の１人を見ると

『人間　Ｃ　』

と浮かんできた。どうやら人は人という種族のみであり、他の種族に進化する、されることは無いようである。おそらく、訓練または経験値などで、ランクが上がっていくのだろう。

この事実は俺を大きく落胆させるものであったが、もう一つの目標かつ野望である最強の種族になる決意を糧に頑張って行こうと思う……

気を取り直して観察に戻ろう。武器、服装を見る限り中世あたりの文明度あると思われる。近代のような華やかな服装もしてなければ、護衛の人間も剣、弓、杖などであり、銃火器のような近代兵器は持っていなかった。

そして観察を始めてから数日たった。この数日で街道で得られる人

の情報はすべて得られたのではないかと思う。人間の強さのランクは大体D～Cのようで、Bランクなどは見かけることは出来なかった。

街道を通る人間は、たいてい護衛または武装をしている。その理由は簡単、この森からゴブリンからオーガまで襲い掛かっているからであった。金品狙いではなく食糧または女性の確保が目的であるようだ。

ちなみに食糧に人間も含まれてるようであり、おかげで街道でオーガに生きながら食われる男の姿を見る羽目になった……

大体の略奪成功率は、ゴブリン、オーク０％、オーガが１０％ぐらいだった。やはり知識を持ち、武装した人間の方が強いようだ。さすがに武装してるとは云えDランクの人間がオーガに勝つという事はあまりなかった。

基本Cランクの人間が混じっている場合のみ倒せていただけであり、その為オーガの略奪の成功した時は、だいたいDランクの人間のみで構成されていた護衛を襲った時であった。

街道の通行人を襲う回数は、どの種族も一日、一回～二回であり、少ないように感じるが、襲ったゴブリンやオークは皆殺しにされてるし、オーガも逃げ切れる奴もいるが大抵傷だらけにされるため、襲う回数は少ないのだ。

この街道観察によって、かなり人間の様子について調べる事が出来たし、また進化するためのオーガに進化するためのヴィジョンも見えてきた。

進化するために、街道での観察に加え、準備をしつつチャンスを待った。そして待つこと一週間俺に絶好のチャンスが訪れた。

いつもの如くチャンスがないかと街道を見ていたのだが、遠くから騒がしい音が聞こえてきた。声を聴く限りどうやら襲っているのはオーガであるようだ。

直ぐに俺は、その場が見える所に移動した。オーガが襲っているのはどうやら冒険者のようである。冒険者達は5人のメンバーで、ランクは全員Cランクであったが、オーガは1人の女の確保に成功したようであった。

女をオーガの一体が森の方向に向かって逃げてきており、冒険者の足止めをするのだろう残りの7体のオーガが5人の冒険者を相手にしていた。

俺は逃げてくるオーガに狙いを定め、罠を仕掛けに走った。罠と言ってもそう大がかりなものではなく、木と木に草の蔓を巻き、それを足を引っ掛けて転ばすだけである。

広大な森の何処から入ってくるか分からなければ成立しない罠だが、その問題もクリア済みである。

魔物が街道を襲う時は何か所かの決まった場所から襲っており、その為獣道ならぬ魔物道が出来上がっているのだ。失敗しオーガが逃げる時は大体一番近くの魔物道を通って逃げようとするのでその魔物道に罠をしかけるのだ。

罠が出来上がり、逃げてくるオーガを見ると案の定此方に向かって走ってきている。背中に担がれた女も気を失っているようでまった

く動かない

『人間　B　』

「はぁあ！？」

思わず隠れているのに声を上げてしまった。背中に担がれていたのはBランクの人間だったのだ。

「なにがどうなってるよ……」

訳が分からず呆然と近づいてくるオーガを眺めていたら、その問題の女が目を覚ました。

「ん……此処は？えっ？なんでボク、オーガに捕まってるの！？あれ！？武器もない！！？」

「なんでこんな……離してよー！！！」

オーガの背で暴れ始めたが、オーガの力には敵わないらしく逃げることはできないが、暴れた手や足が背中に当たる度にオーガの顔が苦痛に歪んでいた。さすがBランク……

凄まじい背中の痛みに耐え、ようやく安全な森の中に帰ることが出来、苦痛に歪む顔にほっと安堵を浮かべたオーガに俺の罠がオーガを襲う！！

「グオッ！？」

「きゃあああああああ！？」

蔓が足に掛かり、走っていたオーガは盛大に転んだ。担がれていた女も拍子に飛ばされていたが、そんなことは今は無視でオーガに襲い掛かる。

起き上がろうとするオーガの首めがけて直剣を何度も振り下ろす。そしてオーガの首を切り落とし絶命させた。

「来た……」

自分の体が大きくなるのを感じる。目線が大きくなり辺りのものがだいぶ小さく感じ、力もゴブリンからオークになった時より漲ってきた。ランクアップしてCランクになったからだろう。

「すごっ……魔物が進化するとこ初めて見た……」

連れ去られた女がいることを思い出し、声がする方に向くが誰も見たらなかった。

「どこ行ったんだ？あの女……」

「いるよ！！すっごい居るよ！？」

目線を下げたら普通に居た。一気に身長が上がったのでやはりいつもと比べ勝手が違うようだ。

「すまん。小っちゃくて見えなかった」

「小っちゃくないよ！！あんたが大きんだよ！」

自分の大きさをアピールするかのようにそこに飛び跳ねてる女を眺める。身長は確かに俺が大きくなった所為で小さく感じただけで、一般平均ぐらいはありそうだ。赤髪のショートカット、顔は整っていて、美人というよりは可愛い顔立ちであった。

「何さジロジロ見て……ハッまさかこのボクを慰み者にする算段をしてるの！？」

女は自分を庇うかのように両手で自分の体を抱きしめる。しかしこの女、魔物を目の前にしてのこの余裕、神経が図太いのかそれともただの馬鹿なのか……

「なわけないだろうが……」

「ふーん、なんか変わってるねキミ。オーガなんて女見かけたら即襲い掛かってくるんだけどね。元がオークだから？」

「知らん。襲い掛かってくる魔物を目の前にして動じないお前の方が変だろ」

「んーなんかキミが他の魔物と違う気がしたからね。ボクの勘は当たるんだよ！！」

と自慢げに腰に手を当て胸を反らす。胸はもうちょっと頑張りましょうといった所だな。

「キミ、なんか失礼な事考えてたでしょ？」

「考えてねぇよ……まあいい俺はもう行く。お前のお仲間が直ぐ近くまで来てるぞ」

どうやらオーガを殲滅したらしい5人の冒険者が此方に向かってきているのが見える。俺が奴らに見つかったら厄介なことになるので、此処は退散するに限る。

「待って！！ボクがどうしてオーガに捕まってたか教えて欲しんだ」

「は？オーガに負けて捕まったんじゃないのか？」

「そんなはずはないよ。ボクはオーガ相手なら１０体居ても負けないんだから」

嘘ついてると思ったが、表情を見る限りどうやら嘘はついていない様である。オーガに力では負けていたが武器を持てば違うという事なのだろう。

それに良く考えてみればおかしい所がある。7体のオーガをこの短時間で倒せる仲間が居るのに何故捕まったのだろうか？Dランクの人間ならともかくBランクの人間がである。

「お前が捕まった状況は知らん。俺が見つけた時には既にオーガに運ばれていたからな」

「ふむふむ。じゃあやっぱり……まさかここまでやるなんて……」

「おーいもういいか？俺は行くぞ？」

冒険者達はもうそこまで来ている。もたもたしていると俺が殺されてしまう。考え事に付き合ってたら殺されましたーなんてことになりたくはない。

「待って。ねぇその持ってる剣貸してくれない？」

「はぁ？何に使うんだよ。それで俺に攻撃するってなら絶対に貸さん」

「助けてくれた恩人にそんなことしないよ！！ちょっとあいつ等殺してくるだけだからさ。ね？」

しれっとした顔でとんでもない事抜かしやがった……

「ね？じゃねぇよ！！アイツら仲間だろ！？何とんでもない事言ってんの！？」

「あいつ等なんか仲間じゃないよ。ボクが捕まったのはたぶんあいつ等の所為だからね」

そうだとしても助けに来た奴等を問答無用で殺そうとするとは、見た目によらず過激な奴だ……

「ほらよ。ちゃんと返せよ」

「ありがと。ふーんボロボロだねー」

手渡された剣を見て不満そうにする女。せっかく貸してやったというのに……まあボロボロなのは否定できんが……

「じゃあちょっと殺ってくるよ～」

近所へ買い物に出かけてくるようなそんな軽いノリで冒険者達を殺

しに行った女。俺が思ってる以上にこの世界の人間社会は恐ろしい物なのかもしれない……

「アーニィ無事だったのか！」

森から出て来たアーニィという女の姿を見つけ近寄ってくる冒険者達。

「まったく、寝ている時にオーガに捕まるんて君もおちゃめさんだね」

ハハハと笑顔を浮かべ、アーニィの無事を確かめるイケメン冒険者。ぱっと見イケメンで腹立たしいが、悪い奴には見えない。ホントに裏切りをしたのだろうか？

「ねぇ、ケニー」

「なんだいアーニィ？」

「なんでキミ、ボクの剣持ってるの？」

イケメン君の笑顔が凍りついた……

「ボクは寝る時も絶対剣を手放さないし、敵が近づいて来てるのに起きない事なんてのもない」

「そっそれは、あれだよ。オーガが君から剣を外して行ったんだよ！」

「オーガがわざわざボクのベルトに固定してある鞘を外して？そも

そも、キミ達はオーガが襲ってきている間何をしてたの？」

「そっそれは……」

「ねえ、ボク契約の時言ったよね？ボクを裏切ったり、攻撃しかけてきたら殺すって！！」

何と恐ろしい契約だろう。やはりこの世界の人間社会は、俺の想像以上に殺伐としているのだろう……なんか人里に下りたくなくなってきた……

「お、俺達が裏切ったなんて証拠どこにあるんだよ！？」

今まで黙っていた後ろの斧持ちの男が叫ぶ。

「うるさいな。そんなのキミ達を殺して荷物調べればすぐに出てくるよ」

そう言い、剣を構えるアーニィ

「クソ、なんて物騒な女だ……」

後ろの弓持ちの男が呟く。いやはやまったくその通りである。冒険者達も何を言っても無駄と知ったのか武器を構え応戦するようだ。

「いいかお前達。多少の怪我をさせてもいいが絶対殺すなよ！！」

イケメンが他の冒険者に指示をだす。助けに来たのに殺されそうな状況にも関わらずアーニィの命を取らないなんて、なんて優しい男なんだ。がんばれイケメン負けるなイケメン！！

俺がイケメン君を応援している間に戦闘が始まる。冒険者のＰＴはイケメン君含め剣持ちが２人、斧が１人、後衛が杖１人、弓１人という構成だ。一方アーニィは俺のボロボロの剣のみだ。ランクの差はあれどどっちが優勢かは歴然であった。

まず先に仕掛けたのは斧持ちの冒険者だった。重い武器なのにも関わらず素早い動きでアーニィに攻撃を仕掛ける。

しかしアーニィは振り下ろされる斧の側面を剣で叩き、軌道を反らせ流れるような動きで相手の懐に入り込み首を切り裂く。

「がぁっ」

そして、声にならない悲鳴を上げ倒れていく斧使いを見向きもせず、他の冒険者へと襲い掛かる。

そこからはまさに一方的であった。斧使いが殺され動揺する冒険者たちをすべて一刀のもと切り捨てていく。

戦闘が始まって五分もしない内に、５人の冒険者たちがもの言わぬ躯となっていた。

「……」

圧倒的な展開に俺は絶句していた。冒険者達は弱いわけではないだろう。全員素人ではなく訓練された者の動きであった。しかしアーニィはその冒険者達より遥かに上の技量と立ち回りで圧倒した。

相手の剣を受けるのではなく受け流す。動きも無駄がなく自然で、

まるで流れているような動きであった。

「ふぅ、おーい！もう出てきてもいいよー」

そして何事もなかったかの様に俺に両手を振るアーニィ。とても5人を惨殺した後とは思えないノリの軽さであった。

俺は促されるまま森の外へと出ていく。

「これありがと。助かったよ」

貸していた剣を渡してきた。まだ剣には乾ききっていない血がべっとりと付いている……

「あ、ああ。なあこいつ等のミスで捕まって恨むのは分かるが殺すのはやり過ぎじゃないのか？」

「んーまあ単なるミスだったらいくらボクでも殺しはしないけどね。こいつ等はワザとボクを捕まえさせたんだ」

「どういうことだ？」

ワザとオーガに捕まえさせたのに、なぜわざわざ助けに来たのであろうか？

「ボク此奴に求婚されてたんだよ」

と言って既に躯になっているイケメン冒険者を指さす。

「大方、寝ているオーガにボクを襲わせ、そこを助けてボクを惚れ

させようとしたか借りでも作ろうとしたんだろうね。ボクに睡眠薬を盛って、丁寧に剣まで取り外して」

だが予想以上にオーガがやって来てしまったため、その場で倒すはずが連れ去られてしまったという事だろう。

「しっかし油断したなー。パーティ組んで直ぐに求婚されたから大丈夫だと思ったんだけど甘かったよ」

「なにがだ？」

「裏切られないかってことさ。ボクみたいなBランクな冒険者は、パーティ組んだ同じ冒険者に、裏切られて後ろからザクッってことが良くあるのさ」

恐らくBランクの経験値狙いの冒険者に裏切られるという事だろうが、ほんっとに殺伐している人間社会のようだ。ホントに人里に出るのやめようかな……

「はぁー死体は片付けなきゃいけないし、この後の依頼1人でやんなきゃいけないし今日は散々だよ……」

がっくりと肩を下ろすアーニィ。

「死体はこのままじゃ駄目なのか？」

「こいつ等の死体というか武器だねー魔物に拾われると危険だから可能な限り拾わなきゃいけないんだよね。特にこいつ等みたいにいい武器使ってる奴等の場合は」

ほう、それはいい事を聞いた。俺は斧使いの死体から斧をブン取る。

「じゃあこれは、お前を助けた報酬として貰っていくかな」

「別にいいけど……」

「安心しろ。これで人間襲ったりはしない」

「その言葉信じるよ。でも……もしキミが人間襲ったらボクはキミを殺しにくるから」

空気が一変しアーニィから恐ろしい程の殺気を向けられる

「あ、ああ……」

俺の腰ほどにしかない少女に俺は恐怖を隠しきれなかった。一体どれほどの修羅場を潜ればこの年でこれ程の殺気を纏えるのだろうか……

「ん、約束だよ。後、死体片付けるの手伝ってくれない？」

両手を合わせ頼んでくるアーニィ。先ほどの殺気がまるで嘘だったかのような変わり様だ。

「嫌だ。ワケを知らん奴に見つかったら俺が襲われる」

「それもそうか。じゃあここでお別れかな？」

「ああそうだな。また捕まるなよ」

「もう捕まらないよ！キミこそ他の魔物に殺されないようにね！！」

「安心しろ。お前みたいなヘマはしない」

「なっ！？失礼な！もう知らない！！」

プイっとそっぽを向き、死体から武器を回収し始める。俺も森へと帰ろう。オーガに進化し、久々に人と話すこともでき、武器も手に入った。アーニィには悪いが俺にとって今日はとても有意義な一日だった。

## 第5話（後書き）

ほぼ初めての会話文と少量だけど戦闘描写こんな難しいとは思わなかった。
稚拙な文になってごめんなさい。・。・（ノД`）・。・。
もっとうまく書けるよう頑張ります（`・ω・´）

## 第６話（前書き）

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！
おれはこお気に入りが１００超えたと喜んでいたら、いつのまにか１０００超えていた
な、何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかったｒｙ

そんな状況の作者です。
完結するまでに、お気に入り１００件越えを目標に頑張ってきました。まさかその目標を飛び越えまさかの１０００件越えに加え日間一位。
これもすべて読者の皆様のお陰ですありがとうございます！！
これからも頑張って更新していきますのでよろしくお願いします（ｏ＊。＿。）ｏペコッ

# 第6話

オーガになってから俺は知識の整理、これからの計画を落ち着いてやる為、久々にねぐらに戻った。出て行った時とねぐらに変化は無いがだいぶ狭く感じる。

ゆっくりと知識の整理をしたが、あまり目新しい知識は得られなかった。強いて言うならば言語の知識を得たということだろうか。

オークとオーガの知能を比べると大幅に差があるように感じる、恐らくだが知能の大幅な進化も知識の進化の一つだったのだろう。だがもともと人間の記憶と知識を持っていた俺にはあまり恩恵の無い物であった。

身体的な進化は筋力の大幅上昇であり、あの時奪った斧を軽々片手で扱う事が出来るようになった。此処まで進化して新た身体的進化について分かった事がある。どうやら進化してきた種族の身体能力の一部を引き継いでいるようだ。

ゴブリンの聴覚、オークの嗅覚、コボルトは……分からない。特別に何か優れた物を持っていた気がしない。まあ最弱のEランクなのだ何も特徴を持っていなくてもおかしくはない。

さて整理はここまでにして、次なる進化の為の計画を立てよう。此処ら一帯、森の出口辺り一帯にはオーガ以上の魔物は出ないようだ。

つまりだ、次なる進化を求めるなら森の奥に行くしかないと言う事だ……

正直迷う。奥の森に行って探索してたらエルフにばったり出会って、ハチの巣にされる可能性が大きくあるのだ……

しかしこれまでの探索の感じから奥に行かなければ、進化するのは厳しいだろう。人間を殺せばいいんじゃねと一瞬思ったが、そしたらアーニィが現れ俺が瞬殺される。アーニィには現段階で勝てる気がしない……

「やっぱ行くしかないのか……」

虎穴に入らずんば虎児を得ずである。とりあえず今日はここで寝て、明日から出発することにした。

そして出発してからさらに三日、俺は例の惨殺現場近くに来ていた。死体等は他の魔物によって食われたのか骨すら残っていなかったが、この森で此処まで開けている場所は珍しいのですぐに見つける事が出来た。

勿論その広場のあたりを探索するなんてことはしない。そこから少し離れた所を探索していく予定だ。この一帯はエルフ以外のオーガを超える存在が居るかもしれない、そのために慎重に進まなければいけないのだが、このデカい体の所為で身を隠す所が少ないのが難点である。

コソコソその場を離れ、その広場から東側に移動しそちら側から探すことにした。探索を始めたのだがいつも比べ何かこの森に違和感を感じる。その違和感を抱いたまま更に数時間経ちようやく違和感に気付いた。

魔物が居ないのだ。この数時間の間、一体も魔物を見ていない。オ

ーガやオークは勿論、この森で比較的数の多い昆虫系の魔物すら見当たらないのだ。

「なんでだ？」

エルフの所為かと思ったが、オーガが居ない理由にはならない。普通にエルフに喧嘩を売っていたし、普通に他の魔物も見かけられたのでエルフが出ている所為ではなさそうだ。

更に探索を続けると、何処からか音が聞こえてきた。最大限の注意を払って近づいて行くとオーガの声が聞こえてきた。

騒がしい。エルフを襲った時よりも数多くのオーガがいるようであるが、どうやら何かと争っているような感じだ、まだ姿が見えない為何と争っているかはまだ分からないがかなり大規模な争いであるようだ。

ゆっくりと近づいて行く。ようやく争いが見えてきたが、やはりでかい争いであった。オーガ数十体と人間らしきもの達と争っている。

『兎人　C　』

争っているのはオーガと兎人という種族らしい。兎人の容姿はほぼ人間に近い、身長もほぼ人と同じでウサギの長い耳と丸いしっぽを付けた感じでコスプレした人間のようである。

しかも争っている兎族はすべて女であり、俺を含め常に全裸なオーガとは違いちゃんとした布の服を着ている。人間との交流があるのかまたは種族で作っているのか知らないが、俺も服が欲しい。一体いつまで全裸なんだ俺は……

話が反れてしまったので戻そう。この争いはオーガの集落総出で兎人の集落を襲っているようで、後ろの安全地帯には、オーガロードやハイ・オーガが見える。

オーガが総出で襲っている状況であるが兎人が勝っている。恐らく身体能力ではオーガのが上だろうが、兎人はちゃんとした弓や剣があり、自分勝手に戦っているオーガとは違い、統率の執れた動きで戦っている。

「すげぇかわいい……」

闘っている兎人の女は皆美しく容姿が整っているが、特に戦いの指揮を執っている兎人の女が可愛いのだ。腰まで伸びた金髪に整った顔立ち、凛々しく指揮を執るその姿は、まわりの兎人と比べ画一した美しさを持っていた。

一方オーガの方は、前線の味方のオーガが押されているのにも係わらず、ハイ・オーガやオーガロードはまったく出る様子はない。理由は簡単、後ろの安全地帯で捕まえた兎人とお楽しみ中であるからである。

数体のハイ・オーガに一体のオーガロードが居るのだが、前線を無視してお楽しみに熱中しており周りの警戒心はほぼゼロである。

なので俺は俺の特技である、不意打ちをやろうと思う。

というわけでオーガロード達にばれない様に後ろに移動する。しかしこのオーガ達夢中である。どこまで気付かれないだろうかと思って近づいて見たら真後ろまで来ちまったぜ……

「ていっ」

後ろまで来てしまったので、とりあえずロードの首を斧で跳ね飛ばした。胴体から切り飛ばされた頭は気持ちよさそうな表情のまま飛んでいき、それと同時に俺自身の体の変化も訪れた。

「きゃあああああああああ！！？」

犯されていた兎族の女性が悲鳴を上げ、その悲鳴にてようやく気付くハイ・オーガ達。

「その捕まえてる奴らを置いて全員消えろ。さもなければ殺す」

ロードを殺し俺はロードに進化したので、強気に言ってみた。

「うひぃぃぃぃ」

俺に恐怖したハイ・オーガ達がオーガ達を連れ全力で逃げていく。そして残ったのは俺と犯されていた兎人のみであった。

「大丈夫か？」

「ひっ！？」

かなり脅えられた。まあさっきまで犯してた奴と同じ顔だけどさ、やっぱ脅えられるのは悲しい。

「はぁ……もう大丈夫だから帰りな。じゃあな……」

そうトボトボと帰ろうとした瞬間、風切り音と共に何かが俺の腕に刺さる。

「痛っ！？」

腕に刺さったものは矢だった。

「その娘達から手を離しなさいオーガ！！」

そう言ってやってきたのは指揮を執っていた女を筆頭に武装した兎人達であった。

「……」

何だろうすごく悲しい……確かに助ける為にロード殺った訳ではないが、女達助けたし残りのオーガも撤退させたのにこの扱いは一体どういう事なのか……

まあ進化も出来たしここで争っても害しかなので、何も言わずに立ち去ろうとしたのだが、

「待ちなさい！こんなことして逃げれるとでも思っているのですか！！」

（ええ！？俺なんもしてねー！！）

もはや踏んだり蹴ったりである。どうしてこなった。

「ロードの貴方しか居ないこのチャンス逃すわけにはいきません！！」

その言葉と共に武装した兎人数十人が一斉に構える。まさに絶体絶命のピンチである。あえてもう一度言おう、どうしてこうなった……

逃げる事何よりも優先する。何人殺してでも絶対に生き延びてみせる。

俺も隙を見せない様に武器を構える。辺りの空気が張り詰めていく……

「待ってください！違うんです！！」

そんな一発触発の張り詰めた空気を破ったのは意外にも襲われていた女の1人であった。

「そのオーガは私たちを助けてくれたのです！」

「そのオーガがですか……？」

「はい……」

「まあ助けたのは、此奴を殺すついでだったけどな」

俺は殺したロードを指さす。

「なるほど、敵対集落のロードを倒しに来たのですか……」

「違う違う、オーガロードになりたくて殺しただけ」

「なっ貴方は自分の集落の王を殺したというのですか！？」

どうやらいろいろ勘違いされているようで、埒が明かないので此処に現れた理由を簡潔に説明することにした。

「なるほど、オークからオーガに進化して更なる進化をするためにロードを殺したという事ですか？」

「ああ、そういうことだ」

どうやら理解して貰えたようで、とりあえずこれで襲われることは無いだろう。一安心である。

「申し訳ありませんでした。助けて頂いた方に弓を引いてしまうとは……」

と頭を下げ、後ろの兎族達も後に続いて頭を下げた。

「分かってくれたならもういい」

分かった貰えたので安心してその場を立ち去ろうとする俺。早く立ち去って腕に刺さった矢を取って傷の手当てをしたい。これマジ痛い……

「待ってください！せめて傷の手当をさせて頂けませんか？」

断る理由はないので勿論快諾した。渡り船とはまさにこの事である。

兎人達の後に付いて兎人の集落まで案内され、そこで手当てを受けた。集落に入った当初は俺がオーガである為、事情を知らない人にかなり警戒されたが、事情を知ると暖かく迎えてくれた。

兎人の集落は人間に近い集落であった。村の人口は５０～６０人程であり、ちゃんとした木造の家々が立ち並んでいた。オーガと兎族、同じ魔物の仲間でランクも同じだが、此処まで知能の差があるのかと少しショックを受けた。

傷の手当てが終わると、この集落の長の元に行き、長に改めてお礼を言われた。長というぐらいだから、どんな婆さんだろうと思って会ってみたら、綺麗な小母さんだった。それでもこの集落の最年長であり、兎人老化は人間の中年辺りで止まるらしい。

長の小母さんに集落を助けてくれたお礼をしたいと言われたので、俺は即答で

「腰布ください！！！」

全力で頼んだ。何故かって？そりゃ俺が今、全裸だからさ。５０以上いる女性の中、全裸の男が１人……どんな羞恥プレイだよ……

長は俺のそんな気持ちを理解してくれたのか直ぐに俺に腰布を用意してくれた。黒い布にちょっとした刺繍が入った物であり、俺の好みな感じだったので喜んで着させて貰った。これで俺のマイサンへの視線をカット！

俺の心の重荷がちょっと解放された気がした。

そうこうしている内に日が暮れ始めて、長に今日は此処に泊まらないか？と提案されて久々に家で寝れると快諾したまでは良かった。まさかこの後、長から問題発言が飛び出すとは夢にも思わなかった。

長とこの兎族についてや他に他愛のない会話をしていたはずなのだが

「ふふっ、あっそうですわ。今晩お泊りになるついでに、集落の誰か孕ませて頂けませんか？」

突如、爆弾が降ってきたのだ。

「すいません。言ってる意味が分かりません」

「今晩お泊りになるついでに、集落の女の子とHして、赤ちゃん作って頂きませんか？」

丁寧に分かりやすく言い直してくれた……

「ってそういう意味じゃなくて！！相手の事とかいろいろあるでしょ！？」

「うふふ、心配しなくても大丈夫ですよ。気に入った女の子を選んで下さいな」

そういう意味じゃねえ！！！

「じゃなくて、俺に選ばれた女の子の意思とかはどうなるんですか！？」

今日初めて会った男であるに加え、今日襲った種族と同じ俺に抱かれてもいいなんて思う奴なんて居ないだろう……

「お優しいんですね。心配なさらなくても大丈夫ですよ」

と言い、大丈夫な理由を簡潔に教えてくれた。兎人はオーガとは逆の女しかいない種族であり、子孫を残す手段は他種族の男から子種を得る。普段は森を出て近くにある大きな街に、兎人の娼館を建ており、そこに何人か住んで娼婦として子種と金銭を得ているそうな。

そして子供を孕んだらこの集落に戻ってきて、代わりの女の子が娼館に行くという形を取っていて、それが当たり前な集落で育ってきている為、見知らぬ男に抱かれ、子を作るのは当たり前なことであり嫌悪感を抱く者は殆どいないらしい。

今回、俺の様にオークからオーガロードに進化するような強さに加えオーガなのに知識があり良識があるのは、長く生きて来た長でも初めてらしく是非ともその遺伝子が欲しいとのこと。やはり森の中で生きて行くにはより強い個体が欲しいのはどの種族でも同じらしい。

正直、かなり惹かれるものはある。兎人の女の子は皆可愛いしそりゃやりたくないかと聞かれればやりたいさ。だが子供を作るとなると話は別だ。

孕ませてるだけで良く子供は兎人達で育てると言われたが、俺はそんな簡単な事で子供を作りたくはなかったし、ヤり逃げなようなことはしたくなかったので断ることにした。

「そうですか。残念です。ですが、今晩貴方にお世話する者を付けさせて頂きます。その女の子を選んで頂けますか？」

この長、諦めた様で諦めてないな……俺の気を変わらせてやらせる気満々だな。

まあ、可愛い女の子に夜の世話以外、世話されるのは大歓迎だしここまで押されてすべて断るのは気が引けたので承諾することにした。

勿論、選んだ女の子はあのオーガとの争いの時に指揮を執っていたあの女の子である。

「わかりました。説明して連れて来ますので、しばらくお待ちくださいね」

それから程のなくして、長はあの女の子を連れてきた。

「レナと申します。今晩一日お世話させて頂きます。宜しくお願いします」

頭を下げ、俺に笑顔を向けるレナ。

（かわいい！！）

凛々しかった戦の時の表情と比べ、今は柔和で優しそうに笑みを浮かべている。凛々しいあの姿も良かったが、今の優しいそうなこちらの表情の方が可愛い。

レナに連れられ、俺は浴場へと向かっていた。

「あの……初めにお約束させて頂きたい事があるのですが宜しいでしょうか？」

「ん？なんだ？」

「今晩、私を抱かないで欲しいのです」

「え？ああいいけど？」

良いも悪いも初めからそのつもりである。

「申し訳ありません。私は子供を作りたくはないのです……」

「なるほど、理由を聞いても？」

「私はいつかこの集落を出てこの世界を見て回りたいと思っています。集落を出て行く条件に長からBランクに進化することが条件だと言われ、その進化の為に子供を作る余裕はないのです」

「まあ長から聞いてると思うけど、抱くつもりは元々ないし、気が変わることも無いから安心してくれ」

「ありがとうございます」

その後浴場で裸のお付き合いをし、料理をごちそうになり、一緒に寝ることになった。

レナは、脱いだらすごいし、料理はうまい、その後一緒の布団に入ったのだが、俺は良く耐えたと思う。生殺しという意味をこれ程理解されられ、痛感させられた夜はないだろう……

## 第6話（後書き）

ちょっとここで本編の補足をします。うまく本編で説明できなかったので……

街に娼館を建て金銭を得ていますが、得た金銭は村に必要な物の購入に当てます。また稼いだ一部は娼館に居る女の子達が自由に使える事になっています。

兎人が他種から子種得たら、他種の子供も出来るじゃないのか？という疑問が湧きますが、兎人は行為後、自身に魔法をかける事によってその問題を解決します。兎人が使える魔法は種確定魔法、発火、流水の魔法です。流水は発火と似たような魔法で、ただ水を生み出すだけの魔法です。その為に森の中で有りながら、風呂が存在します。

ですが風呂も沸かすわけでは無く、週に1度程度です。大量の水を沸かすのと片付けるのが大変だからです。

今回は、主人公に襲わせる＋村を助けたお礼として特別に沸かしました。

レナが抱かれたくないとか言いながら、一緒にお風呂入ったり、お布団の中に入ったりしてましたが、これは長に、子供作らないのは大目に見るが、それ以外の村の決まり事は守れと言われているからです。

# 第7話

早朝、地球時代も含め生まれて初めて可愛い女の子に起こされた俺は、今感激で満ち溢れ居る！！

初めてこの世界に来て良かったと思いました。エプロン姿で起こしにくるとか反則です。

俺の本音は置いて、今朝食を食べてるのだがこれまたうまい。

兎人は雑食であるが野菜や果実を好むので、野菜料理が中心である。その為今日の朝食はパン、サラダ、野菜スープ、果実と言った少し質素な料理であったが、最近はオークの丸焼きと果実しか食べて無かったので、あっさりした料理は余計にうまく感じる。

「うまいな……」

「ありがとうございます」

と此方に笑みを向けてくれるレナ。

「普段はどういう物食べていらしたんですか？」

「えーあー、どうしてそんなのこと聞くんだ？」

言いたくない。こんなうまい料理を出された後にオークの丸焼き食べてましたなんて言えない……

「他の種族の方が普段どんな物を食べてるのか興味がありまして、

それに私自身料理が好きですのでどんな料理があるのか気になるのです」

「うっ絶対料理の参考とかにはならないけどいいか……？」

「はい。もちろんです！」

「果実とオークの丸焼きだ」

「えっ？」

レナの笑顔が見事に凍りついた。だから言いたくなかったんだ……

「オ、オークの丸焼きですか……」

「レナは食べたことは無いのか？」

「ええ、人間が飼っている家畜などの肉は食べたことはありますが流石に魔物のは食べたことがないですね……」

「そうか……」

「そ、それではお皿をお下げしますね」

ショックが大きかったようでまさか魔物が食べられるなんて、とブツブツ言いながら片付けていく、やはり魔物を食べるという行為はこの世界では異常らしい。

一服していると、長からの使いがやって来て長が頼みごとがあるから来てほしいとのことなので、長の所に行くことになった。

「エルフの里に、荷物を届けたいのですがその道中の護衛を頼みたいのです」

「エルフだと……」

今だ記憶に新しい惨殺シーンが脳内に浮かび上がってくる……

「この前、エルフの里にオーガが攻め込もうとして瞬殺されてたが、大丈夫か？」

勘違いされて、ハチの巣になるのだけは遠慮したい。あんな奴らに攻撃されたら命がいくつあっても足りない。

「恐らく私たちと一緒に行けば攻撃されることは無いと思います。不安でしたら、里に近づくまでで構いません」

「なら、引き受けよう」

そんなわけで、エルフの里までの護衛を引き受けることになった。俺の護衛対象は１０人の兎人達であり、５人は荷車を押し残りは護衛と交代役員である。

馬とかはすぐ殺されてしまうので集落にはいない。なのですべて人による手押しであるのに加え、足場の悪く移動速度が遅いのでオーガに襲われやすい。

その為、ロードの俺に白羽の矢が立ったわけだ。運ぶ荷物は、調味料や香辛料、布、など森の中ではなかなか手に入りにくい物を兎族が人里から仕入れ、エルフに届けその代わりエルフが作った弓、呪

術具と村が何かに攻められ本当に危険な状況になった時に助けて貰う事になっているそうだ。

何故そんなことをしているかというと、エルフが外界との関係を切りたいからである。しかし、すべて関係を切ってしまうと生活が困るので、兎人を経由して必要な物を得ているらしい。

外界との関係を切りたい理由は、エルフ族が強い力を持ってるかららしいが詳しいことは良く分からなかった。

で、現在その準備中なのだが腰布巻いて、斧担げば準備が終わりな俺と違って鎧着たり、矢を準備したりで時間が掛かっている。

まあそんな手持ち無沙汰な状況なので、呑気にレナの準備をボケっと見てるのだが、普段、服を着ていたらスラッとしているのだが昨晩、風呂場でレナが服を脱いだ時に巨大な白桃が二つ現れた時はビビったね。女性の神秘を垣間見た気がする。

「どうかしましたか？」

「！？、いやなんでもない……準備は終わったのか？」

どうやら考えに浸りこんでいたようだ近づくレナにまったく気付かなかった……

「はい。皆の準備が終わりました。出発しても宜しいですか？」

「ああ、構わない」

俺達は集落から出発した。５人で荷車を押すといってもかなりの量

があり、移動も遅く辛そうにしていたので代わって上げることにした。最初は客人にそんなことはさせられないとレナを中心に断られたのだが、遅くてイライラすると正直に言ったら代わってくれた。流石に1人で運ぶのは無理だったがそれでも移動速度は二倍以上速くなり、相変わらず森が静かであった為、予定よりかなり早い昼前にはエルフの里に到着することが出来た。

「やっぱ何もないよな？」

着いた場所は、やはりあの例の開けた場所であったが、そこにはあの時と変わらず何も無かった。

「なあレナ、ここに本当に、エ…」

「止まりなさい！オーガよこの里にそれ以上近づくなら撃ちます！」

突如、声がしあの時と同じように何もない所から二人のエルフが現れた。二人の内1人はこの前見たヴァンと呼ばれた金髪の青年であったが、もう1人は銀髪の女ではなく金髪の女であった。髪はショートカットで如何にも真面目そうな顔つきであった。それにこの二人はどことなく似ている気がする双子なのかもしれない。

止まるにも何も初めから動いてなかったのが、どうやらそれを突っ込める雰囲気ではなそうである。

「待ってください！！」

レナが事情を説明するために前に出る。やっぱり、エルフの里を見るのを我慢して別れれば良かったな。メンドクサイことになってし

まうかもしれない……

「貴方はレナ殿！？なぜ貴女がオーガなどと一緒にいるのですか？」

「彼には此処まで来る為の護衛をして頂きました。決して害を成す方ではないのでご安心ください」

「なっ！？あなた方兎人はオーガを受け入れたというのですか！？」

「違います！そうではありません。これには事情があるのです」

「ふむ、わかりましたそれでは事情をは」

「いいや、事情なんて聞く必要なんてないよシィル。もう答えなんか出てるじゃないか」

今まで黙っていたヴァンが、シィルと呼ばれたエルフの追及を制した。

「オーガと一緒にいる時点で受け入れたのは明白だろ？大方、何時もの様に取引をする振りをしてこの里を襲うつもりなんだろ？人間の子種を得ているような下賤な種族の考えることなんてお見通しだよ」

そう言い此方に矢を構えるヴァン。

「まあ僕は高貴なエルフ族だからね。今日、このまま帰るってなら見逃してあげるよ。もう君たちのような下賤な種族とはもう取引もしないし、次この里に近づいてくるよなら次は容赦なく攻撃するよ」

（このクソ野郎が！！！！！）

この気取ったクソ野郎をぶん殴りたい。いや殺したい。だが今の俺では何も出来ず殺されるのがオチだ。

このクソ野郎に対する怒りと、そして何もできない非力な自分への怒りで握った斧がカタカタと揺れ、全身が震えてくるのがわかる。

「あははは、オーガ何だいその眼は？この僕とやろうというのかい？この前みたいに僕がお前を穴だ、ぶれああげあ！！？？」

突如、ヴァンがぶっ飛んで行った。

「貴様はいつから里の取引を決められるようになったんだ？ヴァン」

その言葉と共に現れたのは、アルと呼ばれた銀髪のエルフであった。

「ア、アル様何を！？」

ぶっ飛んだヴァンが抗議の声を上げる。その頬は真っ青に晴れ上がっていた……

だがずっと睨めつけていたのにも関わらず、なんでぶっ飛んだのか全く分からなかった

「黙れ、貴様は先ほどからなんと言っていた。兎人が下賤？エルフが高貴？貴様何様のつもりだ！！」

「ぶぎゃは！？」

またヴァンがぶっ飛んでいく。アルと呼ばれた女が何かをしてるのは理解できるのだが……

「私達の者が無礼を働いたようで、すまなかった」

動かなくなったのを確認して、こちらに謝罪を述べる。

「疲れているだろう？里に入ってゆっくり休んでくれ」

どうやらなんとか成りそうである。とりあえずホッと一息を着いた。

「お断りします」

その拒絶の言葉を言ったのはレナであった。

「確かに私たちは他種の力が無ければ子を成せないし、貴女方エルフの様に力もない種族です。ですが！私達にだって誇りがあります！下賤な種と見下され馬鹿にされた相手と取引なんてできません！！」

毅然としたその態度にこの場の俺を含めほぼ全員が気圧されていた。普通に考えればエルフに楯突くなど蛮勇、愚かとしか言えない行為だ。だが

エルフ相手に毅然と立ち向かうレナは、とても美しかった……

「当たり前だ。下賤なものと取引なんてするものか！！」

いつの間にか復活していたヴァンが叫ぶ。しかし両頬が見事に真っ青に晴れ上がっていた

「……黙れ！」

アルから膨大な殺気が生まれる。……いやそんな生易しいものなんかじゃないまるで死、その物だ。向けられた者は死を感じる事だろう……

「いいいい！！」

断末魔ごとくの悲鳴を上げ気絶した。

「重ね重ねすまない。」

「いえ、もう気になさらないで下さい。それでは失礼します」

「ごめんなさいレナ。何かあったら言ってね、絶対に助けにいくから！！」

「ありがとうシィル」

踵を返して、俺達はエルフの里を立ち去った。

集落まであと中ほどといった所まで来たのだが、微かな物音を感じた。

「ん？何の音だ……」

普段ならたいして気にしない音でも、この異様に静まり返った森の中では警戒しなければならない。何度も此処を行き来しているレナもこの静けさは何時もと違う言っていたのだ、警戒しすぎるぐらい

で丁度良い。

どうやらレナ達は気付いていない様である。辺りを見回してみると、遠方で何かが動いた気がした。

何やら真っ白な人影が見える。そうすべてが真っ白なのだ、髪、服がすべてが白い。白く髪は顔を隠すほど長く、体は真っ白な外套に包まれていた。

異様過ぎる……森の深くなのに汚れが全く見えない。遠方で見えないからとは思えない……

そしてその白い人影は気付き、その髪で奥でニッコリと笑みを浮かべた……

（ヤバイ！！アイツはヤバイ！！！）

白い顔に一本の赤い筋が走るような笑みを浮かべたそいつを見た瞬間体に悪寒が走る。そして直感する。森が静かなのはアレが原因なのだと……

「逃げろ……全員荷物捨てて全力で集落まで逃げろ！！！」

「えっ？」

「何……あれ？」

他の兎人も気付いたようである。そしてその真っ白なものは此方に近づいてきた！

「早く行け！」

アレは姿が消えたと思ったら前方に現れ、ワープしながら此方に近づいて来てる。脳内に見えるはずの種族名も見えない……

「貴方は！？」

「アレの足止めをする……」

「そんな！？私も残ります！」

「いいから早く逃げろ！それで助けを呼んで来い。俺らじゃどうにも出来ん！！」

「わかりました……絶対に死なないで下さいね！！」

レナ達は荷物を捨て、その場から逃げだす。

俺は引き付けるように一旦ここに留まり、奴が近づいて来たら引き付ける様に逆側へと走りだした。

俺に標的を決めた様で此方に近づいて来ている。森で移動が遅い俺と比べ、すべての障害物を無視して移動してくる奴とは移動スピードが違う。追いつかれるのも時間の問題だろう。

そしてその通り直ぐに追いつかれることになった……

「クスクス」

奴と対峙する。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い、恐怖で心

が埋め尽くされる。

「う、うあああああああああああああ」

俺は恐怖の余り攻撃を仕掛けてしまった。だが攻撃は届くことなく、逆に何かにぶん殴られるような衝撃を受け、木々をへし折りながらぶっ飛んでいく。

「ガハッ」

肋骨が数本折れ、体に走る激痛で正気を取り戻すことが出来た。奴は俺も玩んでるのだろうワープせず此方にゆっくりと歩いて近づいて来ている。

（クソ、どうする！？どうする！？）

骨が折れたこの状況じゃまともに走れない。まず逃げ切れることはないだろう……

選択肢はただ一つ、戦うしかない。勝てなくてもいい兎人達が来るまでいいのだ。それまで耐えきって見せる！！

吹き飛んだ時に折れた木を持ち上げ、投げつけるがまるで虫を払うかの様に木を弾き飛ばす。

「クッソ、化け物め……」

ならばと、俺はまた木を担ぎ上げ投げつける。そしてその投げつけた木に隠れるように一緒に接近する。

また木を払いのけた奴の隙に渾身の一撃を首に叩き込む！！

（勝った！！！）

勝利を確信した。オーガの怪力の一撃を首に叩き込んだのだ。無事であるはずがない！

俺に返った来たのは恐ろしく硬い物を殴った感触だけであった。

「えっ？」

俺の斧は確かに奴の首に当たっていた。がそれだけであった。首には何も傷も無ければ、何も無かったかのように微動だにしていなかった……

「え、あ……」

また衝撃が俺を襲う

「ガハッ」

木々を折り、エルフの里の開けた場所まで引き飛ばされ何かに激突した。

「がああああああああああああああああああああ！！？」

背中に焼かれているような激痛が走る。これがエルフの里の結界なのかもしれない

バタリとその場に倒れた俺に奴はゆっくりと近づいて来ている。

（クソ……もう駄目か。ハハッ。死んだら地球のベットの上で目覚めないかな……）

俺が諦めた瞬間。一つの風切り音と共に矢が奴に当たった。

「その人から離れなさい！！」

そう言ってやって来たのはレナであった。

「馬鹿野郎！！何故来た！？はやく逃げろ！」

「お断りします！！」

レナが放った矢も奴には効いていない。レナ1人では確実に殺されるだろう。

「ちっちくしょうがあああ！！」

死力を振り絞り立ち上がり、レナへと意識を向けた奴へと向かって行った。

そして俺の意識はそこで途絶えた……

## 第8話

「知ってる天井だ……」

白い天井に蛍光灯、天井には俺の好きだった歌手のポスターが貼ってある。

やはり、アレは夢だったようだ。

（変な冒険の夢だったな。大学生にもなってあんな夢をみるとは俺もまだガキだな）

「あれ？体が動かない……」

起きようと思ったが、体が金縛りになったようにまったく動かない。

「クスクス」

「っ！！？」

このアパートの一室には俺しか居ないのに笑い声が聞こえた。しかもこの笑い声は聞いた事がある……

（あれは夢のはずだろ！？）

あの恐怖が蘇る。だが辺りを確認しようにも首すら動かない。そして笑い声が段々と近づいてくる……

（動けよ！なんで動けないんだよ！！）

ギシリとベットの上に上がり、俺の視界へと入ってくるソレはあの白いアイツであった。

「ひぃ！？」

俺の上に跨ってきた……そして拳を振り上げ、俺の顔目がけ振り下ろした！

「うあああああああああああああああああああ！！」

そこで俺の意識はまた途絶えた……

「知らない天井だ」

目が覚める。だが俺の部屋の天井とは違い、木で作られておりポスターなんてのも貼ってなかった。

今の夢……だったのだろうか？それとも今のが現実で俺はアイツに夢を見させられているのだろうか？

「ふむ。目覚めたようだのう」

身を起こし辺りを確認する。何処かの一室のようであり、そこにはレナ、アルに加え見たことない少女がいた。

「ここはいった」

「良かった！！」

おっぱいが俺に飛び込んで……じゃなくてレナが抱きついてきた。
俺の頭がレナの胸に包みこまれる。何処までも沈み込んで行きそうな、だが弾力があるというけしからん胸を堪能する。
ここが天国か……
『サキュバス　B　』
と頭に浮かんできた。そうかレナの胸はサキュバスだったのか……
至福の時はそう長くは続かなかった。そう、レナが離れて行ってしまったのだ……
「ここは一体どこなんだ？それにアイツはどうなったんだ……？」
どうやら助かったみたいであるが、分かってるのはレナの胸はすばらしいという事だけだ。
「ここはエルフの里で、あやつは儂とアルで追い払った」
と説明してくれたのは、先ほどの黒髪の少女であった。
「お前が？アイツを？」
「ああそうじゃ」
と特に自慢するわけでもなく淡々と答える少女。
「信じられんな。何処をどう見てもようじ、ゴフッ！？」

すべてを言い切る前に腹を殴られる。俺を殴った手が見えなかった。

何この幼女強い……

「誰が幼女じゃ、無礼者め。儂はこれでも貴様より遥かに長く生きておるわ」

「つまり合法ロリ、ゲフッ！？」

先ほどより強く殴られる。腹を抑え蹲るが、そこで初めて自分の体の異常に気付いた。

「あれ！？俺小っちゃくなってる！？」

赤黒かった肌は人間のような肌色に変わり、２m以上あった体は縮み、手のひらはまるで子供の手の様に小さくなっていた。

自分の頭にある知識を確認してみるとなんか知識が増えていた。どうやら進化したらしい。

進化した種族はBランクの小鬼という種族である。なんだろうオーガより弱そうな名前と体躯である……

あの白いのと戦った所為だろうか？

（あれ？じゃあレナは？）

確認してみると、レナの胸だけがサキュバスなんてことは無く、ちゃんと進化しているようであった。

「なんで俺とレナが進化してるんだ？」

「恐らく奴と戦った所為だな」

ここで初めてアルが口を挟んだ。

「経験値を手に入れるのはダメージを与えたか、殺したかのどちらかだろう？」

俺はただ一方的にリンチ食らってただけである。

「レナ殿の話から様子を判断すると、奴に一撃を与えたからだな。それで進化したのだろう」

ダメージを与えられずとも、一撃当てるだけで進化できる強さを持った奴だったってことか……どんな化け物だよ……

「そうか……助けてくれてありがとう。お陰で生き永らえた」

三人に頭を下げる。

「ふむ。一応最低限の礼儀は弁えてるようじゃのう……」

「なあ、あの白い奴の事とあんた達の事を教えて貰ってもいいか？」

進化しても今のレナを除く二人の名前が頭に浮いて来ない。アイツを撃退できる者とは、一体何者なのだろうか？

「あやつは、『すべての死者を統べる者』じゃ。全てのアンデット

系の魔物の長と言った所じゃな。そしてあやつは、死を撒き散らす。あやつが通った後には死体が大量にあるからのう。無表情にまるで義務の様に出会った者に死を齎すのじゃ」

なんいとう化け物。名前からす判断するに、あれがアンデット系の最強の者なんだろうな……

（無表情……？）

「ちょっと待ってくれ。アイツ笑いながら襲ってきたぞ？」

無表情なんて無縁の笑みで襲ってきたはずだ。

「なんと！？ふむ……理由はわからんの。お主の事を気に入ったんではないのかのう？」

良かったのうと笑う。こっちは笑い事じゃねぇ！！

「儂とアルについてじゃが、儂の名はクーデリア。『竜を統べる者』。アルは『妖精族を統べる者』。まあ簡単に言えば、竜族の王と妖精族の王と考えれば良い」

なるほど、同じ王ゆえにアイツを追い払えたのか。

「竜？クーデリアが？」

アルは理解できる。毅然とした態度に溢れ出る気品、王と言われても納得できる容姿をしている。

だがクーデリアは……

「……どっからどう見てもようじょおおお！？」

またもや腹を殴られる。地味に痛い……。だってどう見ても少女が偉そうな言葉を喋ってる様にしか見えない。

「まったく失礼な奴じゃな。儂を竜王と知ってそのような態度を取る奴は初めてじゃ。言っておくが今は人の形を取っているだけであって本来の姿に戻れば、お前を踏みつぶすのは簡単じゃぞ」

「まあ態度はあれだ。クーデリア達が俺にそうしろってならそうするさ。命の恩人だし」

堅苦しい敬語のような喋り方は苦手だし、許されるならやりたくないのが本音だ。

「まあ、別に気にしとらんがな」

「おお。流石は竜王、体は小さくても心はひろグハッ」

何でだよ。褒めたじゃないか……

「殴られるために挑発するとは……話には聞いていたが、なるほど、これがマゾヒズムというものか」

ちょっと待ってくださいアルさん、違いますからね。喜んでませんよ俺……

「そういえば、この体の怪我もクーデリア達が治してくれたのか？」

今さらながら怪我が治っていることに気が付いた。あれ程の大怪我だったのがほぼ完ぺきに治っている。

「いや、私たちは何もしていない。お前が自分で治した」

「えっ？どうゆうこと？」

「儂らが聞きたいぐらいじゃ。有り得ぬ速さで、傷が再生されていったわ」

クーデリア達曰く、駆けつけてきた時には、俺は三度目のぶっ飛びと二度目の背中への根性焼きを味わっていたらしく、背中は焼き爛れ、折れた肋骨は腹を突き破っていたが、その傷がほんの一時間ほどで再生されたらしい……

「お主はコボルトみたいな奴じゃのう」

カッカッカッと俺をからかう様に笑う。コボルトみたいな奴どころか元コボルトです。

クーデリアが言う事が本当なら、コボルトの能力は超再生って感じか。怪我する奴なんて居なかったから分からなかったぜ。

食われて死ぬって意味でな……

その後も色々状況を聞いたが、どうやら俺は丸一日寝てたらしく。兎人の集落への連絡などは全部終わっているらしい。

俺が寝てる間、ずっと看病してくれていたレナが集落へ戻ると言う事なので、それに着いて行くことにした。

とりあえずまた全裸に戻ってたので、服を貰って部屋を出た。

「ククク、お主、扉で頭下げなくても当たらぬぞ？」

「ああ、ホントだな。昔の癖が出たようだ、まあ幼女には分からない感覚だろゴフッ」

そんなやり取りをしながら、建物を出たのだが

「広い……なんでだ？」

木造の平屋の家が何軒も建っている。こんな広い場所は森の中に存在しないし、里に入る前も家すら見えて居なかった。

「此処は、魔法で作った空間の中にあるからな。入口から侵入されない限り里が発見される事もなく便利なんだ」

「へーなるほどね」

魔法ってのは便利なもんだなと眺めていたのだが、面白いものを見つけた。

「なあ、あれ何やってんだ？」

その面白いものとは、里の目立つ所に、あの小生意気なヴァンを含め十数人が、正座をさせられ、手を後ろで縛られ、さらに膝の上に石を乗っけられていた。

「この里の中に居た選民思想を持つ輩達を矯正している」

さすがに、ギザギザの木の上に正座させてはいないが、矯正させるのに拷問の手法を取るとは、見かけによらず恐ろしい人であるようだ。

まあ個人的にはよくやったと褒めたい。

「ふむ……お前もやりたいなら準備をさせるが？」

余計な気遣いだ！俺はマゾじゃねえ！

そんなアルの気遣いを断りつつ、里の出入り口へと向かった。

クーデリアは竜の里へ、アルはここに残ってヴァン達の矯正をしていくらしい。てっきりアルは此処に住んでいるとばかり思っていたのだが、妖精族の里は此処だけではないらしく普段は里と里を渡り歩いているらしい。

ちなみに何故竜であるクーデリアが此処に居たかというと、あの白い奴を追っかけて来たとのこと。今回あの白いのを殺せたから、一旦竜の里に戻ってゆっくりするらしい。

しかし、あの白い奴は、殺してもしばらく経てば復活するとのこと。気に入られたかも知れんから、復活したらお主の所に真っ直ぐ来るかものう、と笑いながら言ってくれたが、ホント笑い事じゃない。

クーデリア達と別れ、レナと一緒に集落へと戻り、長に今回の件について謝罪とお礼を言われ、今晩も泊まって行くことになった。

身長が１５０?と子供っぽくなった所為か、兎人のお姉さま方から今晩の泊り相手として熱烈なコールが来たが、勿論レナを選んだ。

「進化してしっぽと羽が生えたんだなー。その羽で空飛べるの？」

一緒にまた風呂に入っているのだが、レナは、兎の耳と丸いしっぽが無くなる代わりに、黒い羽と黒くて少し長いしっぽが生えていた。

「そうみたいですね。この羽というよりは、魔法で飛行が出来るようになるみたいです。まだ試してないので分かりませんが」

「空を飛べるのは羨ましいな。俺は小さくなっただけだからな……」

「ふふっ可愛らしくて素敵ですよ」

可愛らしくなるんじゃなくてかっこよく成りたかった……

その後風呂を出て、夕食を食べて、ベットへと潜り込んだ。

「私を抱いて頂けませんか？」

いざ寝ようと思った矢先。一緒にベットに入ったレナから思いもよらぬセリフが飛び出した。

「えっ！？」

「今回、貴方が居なければ私達は全員殺されていました。感謝しても感謝しきれません。どうか私からの感謝の証として、私を抱いては頂けないでしょうか？」

「レナ……俺は……」

「私はサキュバスに成りました。精を糧にできますので子を成す心配はありません。ですので……」

「いえ……違いますね。私は貴方が欲しい！どうか私を貴方の女にして下さいませんか……？」

「レナ、俺の女になったら俺は絶対お前を手放さそうとしないし、絶対に逃がさない。それでもいいのか？」

「構いません。私は貴方が欲しい、貴方のモノになりたい」

その言葉に俺の覚悟は決まった。

「分かった。レナ、俺のモノのになってくれるか？」

「はい！」

その返事を聞くと共に俺はレナへ襲い掛かった……

翌朝、窓からの日の光によって目覚める。もう日もだいぶ高くなっており、もう昼近くの様だ。

隣ではまだレナが寝ている。それも仕方がない。朝方までずっとやっていたのだから……

どうやら、進化はこっちの方にも影響があったらしく、俺のマイサンは子供の体型の俺に似合わないほどデカいし、いくら出しても収まらなかった。まさに絶倫状態であった。

さらにレナの体は素晴らしく具合が良い為、自制がまったく効かなかった。肉欲に溺れる、その言葉の意味をよく理解できた一晩であった。

しかし、淫魔のサキュバスに対して、夜の行為で圧勝するとは思わなかった……進化とは恐ろしい物である。

寝ているレナを起こさない様にベットから抜け出し外へ出たんだが、どうやら全員昨日の俺らの行為を把握してたようで、長からは、レナの体はどうでした？と聞かれ御姉さま方には今晩は私のとこに来いとせっつかれ、その後、レナが起きてからこれからどうするかを話し合った。

レナによればこの森にはエルフ以外のCランク以上の魔物は居ないらしく、俺にはもうここに居る意味もないし、レナも外の世界を見たいという希望も相まってこの森を出ようという話になった。

そのことを長に伝えに行ったのだが、俺達がそう言ってくるのを予想していたらしく、路銀やら旅に必要な物を準備してくれていた。

そこでいつ出るかを話し合い、二日後に出発することになった。

俺とレナ両方とも人里に出るのは初めてな為、最初は助けてくれる者がいる所が良いだろうと、兎人の娼館がある街に行くことになり、丁度、集落と娼館の人の入れ替えを行う時期なので、ついでに街まで護衛をして欲しいとのこと。断る理由もないのでその案を受け入れることにした。

そして、出発の準備をし瞬く間に二日が経った。

「元気でね！！」

「レナーお土産いっぱいよろしくねー」

「レナ、辛くなったらいつでも帰ってきなさい。貴女の故郷はここなのですから」

「皆、ありがとう。……それじゃあ皆！いってきます！！」

俺達は、集落の皆の見送りを一身に受け、期待と不安を胸に抱きながら街へと向けて出発した。

――――――第一章完――――――

## 第8話（後書き）

ここで第一章完になります。次話から第二章に入ります。
前話であのような終わり方をしたのに、あっさりと終わらせてしまいました。主人公覚醒を期待していた人は申し訳ないです（，・ω・、）

補足
エルフをアルが妖精族と言ってましたが、それについては二章にて説明があります。
あと、本編で語る予定が無いので此処に書きます。白い奴とクーデリアとアルの強さですが、クーデリア＞アル＝白い奴になります。

二章についてですが、進化のペースは落ちます。
あと感じが、異世界転生モノに近いものになる予定です。
人間の子供の様になってしまい、折角のモンスターの設定が勿体ないように感じる人がいるかもしれませんが……
色々仕込んでありますので、モンスター物の毛色は失わない様に進めていく予定です（，・ω・、）

これからも俺の成り上がり記を宜しくお願いします（o＊。＿。）
oペコッ

## 第9話（前書き）

第2章スタートです。
説明会となっておりますがご了承ください
これからも宜しくお願いします（o＊。＿。）oペコッ

# 第9話

集落を出発して、森を抜け、街道に出て、襲ってきたオーガを返り討ちにし、順調に街に向かって進んでいた。

草木で荒れた森とは違い、砂利などで舗装された道を歩く。なんと歩きやすい事か。

森の草木の地面とも、コンクリートで舗装された地面とも違う、砂利の道ならではの足音が俺を何故か楽しませる。

この足音を奏でれば奏でるほど、街へと近づいているからだろうか？

俺はこの道中に一緒に向かう兎人達から街の概要を聞いていた。

街の名前はアルヴァス。国の首都と隣国との商業の中継地点として栄え、国の中でもかなり大きい街らしい。更に、近辺にBランクの危険な魔物が出るような所が無い為、冒険者の旅立ちの街とも呼ばれている。

Bランクが出ない街は俺にとっては少し不満のある所ではあるが、人間社会に慣れるという意味では丁度いいのかもしれない。

そうこうしている内に街の城壁が見えてくる。城壁と言ってもそんな立派なモノではない。高さが3メートル程の石壁である。これが街をぐるりと囲み、魔物の侵入を防いでいる。

さほど危険のないこの一帯ではあの程度でほぼ侵入をカットできるらしい。

門をくぐり、街の中へと入る。基本街の出入りは自由らしく、門番はいるが、魔物と明らかな不審人物の見張りだけであり、いちいち全員のチェックはしないようだ。

「すげぇ……街だ……」

何を当たり前な事を言ってるんだと思われるかもしれないが、森の中で生活してた俺にはすべてが目新しい。

木造やレンガの家、行きかう人々、客を呼ぶ店の声、此処には森では決して感じられなかった人々の活気がある。

『猫人　C』『犬人　C』『牛人　C』

初めて見る亜人を幾人も見かけることができる。

街の大半を人間が占め、亜人達が細々と暮らしてるのではないかと思っていたが、そうではなくパッと見た感じ、人と亜人の比率は半々であり、人の街ではなく人間と亜人の街と言ったほうが相応しいだろう。

この街は、東、西、南、北、中央の区があり、北区に、領主や有力者が住む高級街、西区が一般の住宅街、南はギルドや宿屋、酒場、中央が商店街、東が娼館などの遊楽街となっている。

街の入口の南区から東区へ向かっているのだが。

「兎人達の団体だ！」

「ヴェルテちゃんおかえりー！！」

「おっかわいい娘！」

「交代の時期が来ちまったのか……ミメイちゃんとお別れか……」

「また激戦の時期が来たか……」

兎人の団体はやはり目立ち注目を集めてしまう。しかし嫌悪されている訳ではなく寧ろ男たちを中心に歓迎されているように感じる。しかし一部の男達が険しく厳しい顔をしているのは何故だろう？

注目を浴びつつ移動し、娼館に着いたのだが建物がデカい。一階建ての平屋が中心の街並みと違って二階建ての建物だが、横に広いと言えばいいのだろうか。他の建物と比べ画一した大きさを誇っていた。

娼館は表の通りに建っており、その裏に同じ大きさの建物が建っており、そこが兎人達の住居になっているようである。

俺達は裏の住宅の方に移動し、そこで用意されていた風呂に入った。集落を出てから四日間体を洗う事が出来なかった為、着いてすぐ風呂に入れたことはありがたかった。

だが風呂は銭湯の様に大勢で入る様式で、男湯なんてあるわけもなく、兎人達と同じ風呂に入ることになった。良く俺は色々と我慢できたと思う。

「ふぅー疲れたー」

「お疲れ様です」

ベットに腰を掛けレナが差しだす水をありがたく頂く。風呂から上がった後、レナと俺は同じ部屋をあてがわれていた。

「正直、此処まで兎人達が街に受け入れられているとは思ってなかった。なあこんなに受け入れられてるなら街に移住してもいいんじゃないか？」

此処まで受け入れられているなら、わざわざ危険な森に住む必要はないのではないだろうか。

「これは長から聞いた事ですが、１００年程前はこの街に住んでいたそうです。ですが色々と問題が出てしまい森の中へ移住したそうです」

「問題？」

「はい。種を得る為に来る者拒まずで、やって来る男性のお相手をしていたらしいのですが、その中に既婚者や恋人持ちの方々が数多くいたらしく、それで問題が起こってしまったそうです」

「なるほど。それでも既婚者を相手にしないだけで解決したんじゃないのか？」

「そのはずだったんですが、それを隠してくる方が後を絶えず結局……」

男の性欲とは恐ろしいモノだな。まあ俺が言うべき言葉じゃないのだろうが……

「今でもそのしがらみは残ってるのか？」

「いえ、それほど残っていないと思います。森に移住する代わりに、娼館と住居を用意して貰って今の様式になってだいぶ減ったようです」

これ程亜人が受け入れられているのだ、女しかいない種族の事情の理解はあったのだろう。受けれる人数を減らし、娼館で金を取るようになって既婚者や恋人持ちが来る事が減ったのだろう。

それに危険な森に移動したという兎人の譲歩が、女性達の怒りを抑え、男達の同情を誘い、問題の解決の大きな要因になったらしい。

今日は旅の疲れもあったので、ゆっくりと館内で過ごすことにした。まあ夜は別だがな。

翌日、俺とレナは南区へとやって来ていた。目的地は冒険者ギルドである。

これからずっと兎人達の館に世話になるつもりも、この街にそんなに留まるつもりもない。その為、俺達が旅をしながら金を稼ぐには冒険者になるのが一番だろうと判断したのだ。

俺のさらなるランクアップの為にも都合がいいし、レナにも危険が及んでしまいそうな依頼は俺だけで行けばいい。

そのランクアップだが、Bランクに進化して今までと違った事になっている事に加え、俺の進化に問題が出ている。

まず進化して変わった事だが、次のランクアップ先が分からなくなったのだ。レナに聞いたところ、Bランクからは進化先が決まっておらず、今の種族と行ってきた行動によって種族が決まるらしい。

で、俺に起こった問題点についてだが俺は今、小鬼という種族であるが本来の俺の進化先はトロルという種族だったのだ。白いのに襲われた影響か知らないが進化の過程に異常が出ている。

これが悪影響か好影響を与えるのが分からないのが不安な処だ。

冒険者ギルドに辿り着いた。兎人の建物よりは小さいが二階建ての大きい建物であった。

中に入ってみると人でごった返していた。やはりと言うか冒険者という荒事をやるだけあって野郎ばっかである。

兎人に囲まれの華やかな生活をしていた俺にとって此処は地獄なようなものだ。むさくるしい……

とりあえず野郎共をかき分け、一番空いてる受付へと向かった。

「こんにちわ。何かの依頼かな？」

順番が回ってきた俺に、まるで子供に話すかのように、語りかけてくる受付の女性。まあ見た目は子供そのものだけどさ……

「俺は子供じゃない。依頼じゃなくてここに登録しに来たんだ」

「うふふ、ごめんね。もうちょっと大人にならないと登録できないんだよ。背伸びしたい気持ちは分かるけどね？」

（何この女、馬鹿にしてんの？）

俺がこういう種族というのは、一目見れば分かるだろう。それなのにこの態度、喧嘩を売られているのかもしれない。

「馬鹿にしてんのか？俺は子供じゃないと言ってるだが？」

「凄んでも出来ないものは出来なんだよ。もっと大人に成らないとね。それまで我慢してね」

（よし。その喧嘩買ってやろうじゃないか）

「すいません。少し宜しいですか？」

「あっ、貴方この子のお姉さんでしょ？困るんですよねーこういう事されるとー」

レナを俺の保護者だと勘違いした受付が、困った客を相手するように話しかける。

「申し訳ないですが、貴方じゃ話にならないので、別の方を呼んでは頂けませんか？」

「いやですからね。子供は登録出来ないんですよ。他の人だろうが何だろうが規則ですから、無理なものは無理です」

「私達は亜人です。彼は小鬼ですからあのような姿なんです。亜人の受付の方に変わって頂けないですか？」

「いやいや。そんなウソ仰られても駄目ですからね？こんなとこに小鬼の方が来るわけないじゃないですか」

「本当ですから、亜人の受付の方を呼んで頂けませんか？」

「いい加減諦めて――――」

「おい、いつまでやってんだよ。此処はガキが来るようなとこじゃねーんだよ。さっさとガキ連れて帰れよ」

後ろにいた男が、争う俺らにしびれを切らして文句を言ってきた。

「ガキは、お家に帰ってママのおっぱいでも飲んでろ」

「あっお姉ちゃんは残って俺らの相手をして行ってくれよ」

「そりゃいいわ。ぎゃはははははは」

さらに、レナと受付の騒ぎを聞いてた周りの男共が騒ぎ始める。

「んだと！？お前ら全員、ぶっ殺してやろうか！？」

俺の我慢もいい加減限界だ。周りの男共は全員、Dランクの人間である。こいつ等に馬鹿にされるのは、ゴブリン共に馬鹿にされてるようでむかつく。

背中にくくりつけてあった斧を手に取る。

「なんだぁ？このクソガキ俺らとやろうってのか？」

「そんなでけぇ斧振れるのかよ。怪我しない内にママの所に帰りな。ぎゃはははは」

「うるせぇな。首と胴体を切り離してほしい奴からかかってこい。雑魚共」

「んだとぉこのガキ。一度痛い目あわなきゃわかんねぇようだな……」

一触即発の空気があたりを漂う。

（全員ぶっ殺してもいいよな？あっちがケンカ売って来たんだし）

敵は６人、全員Ｄランクだ。負けるわけがない。

「ほら、早くかかって来いよ。首を空中遊泳させてやっからよ」

「このガキぶっ殺す！」

男共が俺に襲い掛かろうとした瞬間。

「止めぬか馬鹿者どもが！！」

俺達を制止する怒声が響いた。その怒声と共に階段から降りてきたのは１人の初老の男性であった。白い髪をオールバックにし、メガネをかけ、背筋をピンと伸ばし降りてくるその姿は、ドラマやアニメに出てくるような執事のようであった。

『人間　Ｂ　』

しかもこの男はアーニィ以来のBランクの人間であった。かなりの使い手であるのはまず間違いないだろう。

「ギルドマスター！？」

受付の役立たずが男性を見て叫ぶ。降りてきたのはどうやらギルドマスターらしい。

「アイノ君、一体これは何の騒ぎだね？」

「えっとこれはこの人達が――――」

役立たずから説明を受けるギルドマスターだったが、説明を聞くにつれだんだんと顔が険しくなっていき。

「このっ馬鹿者が！！」

説明をすべて聞くと同時に役立たずを怒鳴りつけた。

「私どもの従業員が申し訳ありませんでした。此方の方でお話を伺いますので、付いて来てもらって宜しいですか？」

「ああ」

どうやらようやくまともな話ができそうである。そしてギルドマスターに案内されたのは、応接間であった。

絨毯が敷かれ、柔らかいソファーに、高級感のある机。部屋の調度品を見てもどれも高級そうなものばかりであり、喧嘩してた一般人を案内するには些か、場違いな気がする。

「粗茶ですが、どうぞ」

「あっどうも」

給仕であろう犬人の女性はお茶を出し、ギルドマスターを一瞥したあと出て行った。

「当方の職員が、貴方方への非礼、誠に申し訳ありませんでした。彼の者には処罰を下すのでご容赦ください」

「俺達を一目見れば種族なら簡単にわかるだろう？なのにあの態度どうかと思うよ？」

「申し訳ありません。私達人間は相手を見るだけでは種族は把握できないのです」

「えっ？」

確認するようにレナをほうを見たがどうやら本当のようである。

「人間と妖精族は見ただけでは相手の種族は分からないのです。分かるのは私達亜人だけですね」

「なるほど……」

だからさっき亜人を出せとレナが要求してのか。それにさっきの給仕がギルドマスターを一瞥したのは、俺らがホントの事を言っているかどうか確認したということか。

「まあでも見れないからとか言い訳にならんわな」

「はい。おっしゃられる通りです。それでは本題の方に入らせて頂きますが、本日はギルド登録という事でよろしいでしょうか？」

「ああ。そうだ」

「それでは説明させて頂きます」

説明を受ける。長かったので要約すると、生死の保証はない、失敗したら違約金取る、受けられる依頼は自分のランクと同ランクかまたは一つ上か下のランクを受けれる、また何か犯罪を犯した場合は、ギルドの解約、さらにギルドに対しての罰金を支払う事になるらしい。

魔物討伐依頼を受けた場合や特に人数制限されてない場合は、仲間を何人連れてきてもいいが報酬は同じとの事。

アーニィが言っていたように、下手に見知らぬ仲間を作れば裏切られる可能性もある、当面はレナと、または1人出来そうな依頼をこなしていくことにしよう。

「――説明は以上なります。次にギルドカードをお渡ししますね」

取り出したギルドカードは、金属のカードで、右の端には何か水晶のような物がはめ込まれている。

「此方がギルドカードになります。無くされた場合には、再発行に銀貨1枚かかりますのでお気を付けください」

たかがカード一枚に銀貨1枚、一般人の一か月の生活に相当の大金だ、いい素材を使っているのだろう。

「それではカードの水晶に魔力、もしなければ血を垂らして下さい」

指を切るのは痛いので、水晶に魔力を流す。すると淡い発光が起こりすぐに収まった。

「これにて登録は完了です。これからよろしくお願いします」

カードが俺の本人確認になるらしい。カードに込めた魔力と俺自身の魔力が一致することによって本人確認になるらしい。

特に何かを記入することもなく終わって正直拍子抜けであったが、基本冒険者ギルドに登録する者は流れ者などが多いことに加え、毎日結構な新規登録者と死者が出るので、情報の管理が大変らしい。その為、カードの登録だけで済ましているらしい。

登録が終わり、この後商店街を見て回るつもりだったので、特に依頼を受けることもせずギルドを出て行く。

俺達に対して好待遇だったのは、ギルドが亜人に対して身体的に馬鹿したという話を広めて欲しくなかったらしく、ギルドカードの発行料銀貨1枚を無料にするから今日の一件は無かったことにしてくれと言われた。民間の信頼があってのギルドは、種族的な問題は特にシビアな問題なのだろう。

正直、銀貨2枚浮くのは嬉しかったのでその条件を飲んだ。そもそも言うつもりも無かったので、嬉しい誤算であった。

その後、商店街で地球では見たことのない食べ物や道具などを堪能し残りの一日を過ごした。

## 第１０話（前書き）

今回もまた説明回に……
でも気にしない！！

## 第10話

ギルド登録を終えた翌日の早朝。外の騒がしさによって起こされた。騒がしいってレベルではなくうるさい。もはや騒音だ。

「これはひどい……」

窓から外を見てみると、娼館の方に恐ろしい程の男達が集っている。100人以上はいるかもしれない……

パッと見た限り、亜人、人間含めほぼCランクの男で占められている。Dランクの奴が居ない。しかも全員険しい顔をしている。

「まだかあああああ!!」

「早く出せえええ!!」

「俺はこの日を待ちわびていた!!」

叫んでいる内容も、切迫している。昨日聞かされていなかったら俺は武器を持って飛び出していたかもしれない。

「お待たせしました。これより、新しく来た仲間の紹介をさせて頂きます!!」

街での兎人の長が開始の宣言をした。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

まるでアイドルのライブに来ている男達のように、騒音レベルの歓声があがる。

このイベントは顔見せだけではなくて、オークションも兼ねている。何のオークションかと言えば、兎人の処女オークションである。

孕ませＯＫ、高級娼館並みの美人が、普通の娼婦より少し高い程度で抱けるという理由で、人気を誇っている兎人の初物を頂けるとあって、かなり盛況らしいこのオークション。

年に2回の交代の時期に行われ、高ランク優先、同ランクだけだったら積み上げた金額が多い人、前回落札した人は参加できないというルールで行われている。

昔は顔見せだけで、オークションなんてしなかったのだが、処女を貰おうとする男共が早朝より並び、さらに順番を巡っての争いなど起こり現行のルールになったそうな。

なんとも迷惑な男共である……

そんな男共を尻目に、俺はレナを連れギルドへと向か……えなかった。

男共の最前列、こんな所にいるはずの無いと思っていた者が居たのだ。

背筋をピンと伸ばし、白髪をオールバック、黒い燕尾服のような服を着たどこかで見たような男性……

（ギルドマスターだとおおおおお！？）

間違いなくギルドマスターであった。昨日会った時の凛々しさは何処へ、他の男共と同じように歓声を上げている。

ショックである。英国紳士だと思ってたらイタリア紳士だったぐらいのショックだ……

とりあえずギルドマスターを見なかった事にして、今度こそギルドへと向かった。

ギルドに着き中に入るが、中は昨日と違って人が少なく、居る人もほとんど、Dランクであった。

昨日は混んでて気付かなかったが、亜人の受付もちゃんといるらしく、大抵の亜人は、亜人の受付に並んでいた。

ちゃんと確認しとけば、あんな問題も無かったのだろうがこっちに大した責任もないし、銀貨浮いたしで結果オーライだったから気にしない。

一階が依頼の受付と冒険者登録で、二階が依頼の受注らしいので二階へと上がる。

依頼の受け方が分からなかったのでとりあえず受付の人に聞くことにした。

「なあ、依頼ってどう受ければいいんだ？」

「依頼はあちらの掲示板に張られています。受けたい依頼を選び、その紙をこちらの受付にお持ち頂ければ依頼を受けることができま

す」

「わかった。ありがとう」

言われた通り、掲示板に張ってある依頼を見る。丁寧にランクごと整えられて貼られているので結構見やすい。

「んーレナどれ受けようか？」

「そうですね……まずはCランクの依頼を受けてみませんか？進化してどう変わったのかをまだ体感では理解できていませんし」

「そうだな。進化した体の慣らしとしてCランクだな。何があるやら」

Cランクの覧を見ていくが。

「どれもパッとしないなー」

Cランクの依頼は殆ど、他の街への護衛ばっかである。しかも往復ではなく片道である。

個人的には何かの討伐依頼の方が良いのだが……

とりあえずBランクの覧も見て見る。やはり安全の街と言われるだけあって依頼の数が少ない。

「ん？これは……」

気になる名前があったので手に取って確認する。

依頼内容はトロル討伐の仲間を募集、条件はCランク以上、数は2人以上4人以下、裏切らない事。報酬、銀貨一枚、依頼者、冒険者：アーニィ、集合場所、酒場『バロン』

アーニィ……裏切られたのにまた懲りずに募集してるのか……

自分の受けた依頼の手伝いも、ギルドに依頼できるみたいである。

自分の進化先であったトロルが一体どんな種族なのか気になるし、Cランクの依頼とも比べ日数もそれほど掛からない。

Bランクが3人いれば、さほど苦戦もしないだろうし、何より初めての依頼に顔見知りがいるのは心強い。

まああっちが俺を覚えてればの話だが。

レナに事情を説明し、受ける依頼をこれに決定した。

「これ受けたいんだけど」

「はい、こちらの依頼ですね。それでは、ギルドガードを出して下さい」

「俺1人だけでいいのか？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあレナが別の依頼を受けて同時にやるってことは出来るのか？」

「はい。1人につき1つの依頼しか同時に受けれませんが、2人以上で活動する場合人数の数だけ依頼は受けれることができます。ですが自分達の力量以上の依頼を受けて、全部失敗してしまい大量の違約金を払う事になったり、最悪死んでしまう事があるので、あまり同時に依頼を熟すのはお勧めできません」

「なるほど。じゃあこれだけでいいや」

受付にギルドカードを渡す。渡されたギルドカードは何かの壺の中に入れられ直ぐに引き上げられた。

すると、薄いピンクの膜のようなモノがギルドカードを包んでいた。

「これで依頼の登録が完了しました。依頼の成功、失敗が確定するまで次の依頼は受けれませんのでお気を付けください」

「了解、もし依頼中にカード無くしたらどうなるんだ？」

「その場合は、護衛などの場合は依頼人をギルドまで連れてきて頂ければ問題ありませんし、討伐依頼の場合は討伐対象の部位をお持ち頂ければ大丈夫です。ですが、再発行料と今までの依頼成功履歴が消えますのでお気を付け下さい」

「成功履歴がギルドカードに登録されるってことか。でもどこに記載されるんだ？」

「カードに特殊なスタンプを押させて頂きます。その数が一定量増えるとギルドカードの色が変わります。灰色、青、緑、黄、赤、黒、白の順で色が変わります。ギルドカードの色に依って冒険者の信頼

度が分かりますので、白を目指して頑張ってください」

なるほど、自分のランクに依って冒険者のランクが決まるこの世界では、ランクよりギルドカードの色が冒険者の格を示すのか。

「分かった。ありがとう」

「依頼の成功と無事を祈ります。お気を付けて」

ギルドを後にする。集合場所は、よく分からないが酒場というぐらいだから南区のどっかであろう。

そしてやっとのことで、酒場『バロン』に辿り着く。適当に行けば簡単に見つかるだろうと思っていたが、結局迷い。人に聞いてなんとか辿り着けた。

酒場は平屋の木造であり、入口に大きな看板があるという以外は特に他の家と変わらない。

入口の扉を開けてみれば、鐘の音が響き来店を告げ、カウンターがあり、丸い机が立ち並び、男共で賑わっているが、アーニィの姿は見えない。

「おい、見ろよ。あの女、可愛くねーか？」

「でも、ガキ連れだぜ」

「いやでも確かに可愛いな」

やはりレナの容姿は目立つ。後、もういい加減ガキ扱いは慣れた……

注目を浴びつつ、左端のカウンター席に座ろうとしたのだが。
「おっと。坊主そこの席は、座れねぇんだ。そこは指定席でな」
マスターに座るのを断られた。まあ冒険者の溜まり場である酒場だし、店内のルールがあるのだろう。
そんなわけで、その隣の席に座る。
「それでいい。でお客さん、ここに何の用だ？」
「依頼を受けて此処に来たんだが、アーニィという冒険者がいつ此処に来るか知ってるか？」
「お前さん達が受けたのか？……なるほどな。アーニィはもう少ししたら来ると思うぜ。待てない様だったら伝言を預かってやるぜ？」
「いや、いい待たして貰おう。何かジュースのような飲み物を頼む」
折角、酒場に来たのだしこの世界の酒を飲んでみたかったのだが、我慢することにする。
「では、私はミルクをお願いします」
「ミルクだってよ。俺のミルクをごちそうしてやりてーぜ」
「誰もおめーの汚いもん飲みやしねーよ」
「ちげーねーぎゃははは」

男ってのはどこ行っても同じらしい。酔っぱらっても絡んでこないだけマシなのかもしれない。

「なあ、マスターあの後ろの男共、全員ブッ飛ばしていいか？」

「いいが、ちゃんと弁償しろよ？うちの備品は高いぜ」

「ちっ」

残念ながら今、俺に金はない。金が有ったら生きてるのが嫌になるくらい殴ってやるのに……ギルドの時といいストレスが溜まりぱっなしだ。

それから、少し経ち。

「あーーー女性がいる！！」

と叫びながら、お待ちかねの人物、アーニィが酒場にやってきた。

「どうしたのさマスター！数ある酒場で唯一、女性が居ないのが売りのこの酒場に女性がいるじゃないか！！」

「うるせー！そんなの売りにした覚えはないわ！！女も大歓迎な酒場だ！！」

「おいおいマスターじゃあもっと女の客を入れてくれよー」

「黙れ！お前らが来る女に片っ端からちょっかいかけるからだろうが。昼間から酒飲みやがって、そんな暇があったら稼いでこい馬鹿

共が！！」

「あはははは」

アーニィを中心にアットホームな雰囲気が店内に流れる。客層は悪いが、仲は良いみたいだ。

「まったく……まあ俺の客じゃなくてアーニィ、お前への客だがな」

「ボクの？ってことはキミ達が依頼を受けてくれたってこと？」

と言いながら、アーニィは俺の左隣の椅子に座った。どうやらアーニィの指定席であったようだ。Bランク程になると好待遇になるのだろうか？

「ああ。そうだ」

「失礼だけどキミ達のランクは？」

「両方Bだ」

「ってことはキミは小鬼かな？そっちの彼女は……」

「サキュバスです」

「んーなんかこの街じゃ見かけない豪華な顔触れだね。まあいいか、ボクの名前はアーニィ。君たちは？」

「ヴァンだ」

「レナです」

ヴァンというのは俺の名前だ。特に意味は無い。こっちは横文字の名前が主流みたいなので、兎人の里で名前を聞かれたときに咄嗟に出したのがこの名前だった。

ちょっと後悔している。ちなみに本名は『奥山輝明』、いたって普通の名前だ。

「ヴァンとレナね……うん！覚えたよろしくね！！」

「よろしく頼む」

「じゃあ簡単に依頼の説明をするけど、トロルの出た場所はここから馬車で約４日かかる『アングの森』トロルは現在一体のみ確認されてるけど、更に見つけて討伐できるようなら討伐する。トロルの報酬は一体に付き銀貨２枚。これは一枚ずつ分けるって感じだけどいいかな？」

「ああ。それで構わない。出発はいつにするんだ？」

「んーお互い準備があるだろうから明後日の早朝出発で、集合は南区の門でよろしく」

「了解だ。それじゃ俺達は行く。また明後日に」

「えーもう行くの？折角知り合ったんだから、親睦深めようよー」

「悪いな。まったく依頼の準備をしてないんでな」

席を立ち、扉へと向かう。

「あっそうだ。アーニィ」

「ん、なんだい？」

「今度、オーガの背中の寝心地はどうだったか教えてくれよ。じゃあな」

「えっ！？」

アーニィの反応を見ずに店を出る。次合う時は一体どんなリアクションを取ってくれるだろうか、楽しみである。

さて、次は依頼の準備の為に商店街に行かないと……

依頼は明後日だというのに、もうわくわくして来た。ここからが真の冒険の始まり、そんな気がするのだ。

## 第１１話（前書き）

今回は分量少なめです。申し訳ないです（´・ω・｀）

# 第１１話

依頼の当日、言われた通りに早朝に南門へと向かっていた。

この世界に時計という物は一般的には普及しておらず、街の中央にある時計塔にて、朝、昼、夜の三回鐘が鳴り、その音で人々は時間を把握する。

アーニィに集合時間が早朝としか言われてなかったので、朝の鐘が鳴るころが早朝だろうと考えて移動しているのだが、こう時計の無い生活をしていると時計の重要性が良く分かる。

例えば、人と待ち合わせるのも一苦労だ。朝、昼、夜の鐘でしか時間の待ち合わせは出来ないし、鐘の時間には早すぎたのかどうかも判断できない。時間という物がどれだけ、計画的な行動をする為に必要な物かをこの街に来て実感できた。

この世界の人は、日の高さで大雑把ではあるが時間を把握出来るらしいが、時計という物が普及する地球で生きてきた俺にそんな芸当は出来ず、気付けば昼を過ぎてたり、日が暮れ始めたりで、時計の無い生活に少し戸惑っている。

そんなことを考えている内に、待ち合わせの南門へと着いた。鐘が鳴る前に着いたのだが既にアーニィが待っていた。

「おはよう！今日からよろしくね！！」

「はい。おはようございます」

「よろしく頼む」

朝から元気一杯のアーニィを見る限りでは、どうやら遅刻ではない様であった。早朝が鐘の鳴る頃だったら鐘の鳴る時に、と言って欲しかったが、アーニィの言い方がこの世界では常識的な言い方なのかもしれない。

「ねぇねぇ、聞きたいんだけど、ヴァンってもしかしてこの前あったオークだったりする？」

「もしかしなくてもその通りだ。よく分かったな」

意外にもうバレてたんだな。あの日は斧も持ってなかったし、見知らぬ奴に恥ずかしい秘密を知られ慌てふためく姿を見たかったのに……

「ギルドにも詳しいことを話してないし、あのことを知っているのはキミしか居ないからね！！」

「なるほどね。つーか5人も殺しておいてお咎めはなかったのか？」

地球だったら過剰防衛なんて言えないレベルの出来事だったのだ。いくら地球より文明や法体系が低いからといってまったくお咎めなしってのはないだろう……

「無いよー。Bランクが襲われるってのは良くある事だし、それについての反撃も認められてるし、物的証拠もあったし、何よりボクはこの街でずっと依頼をこなしてたからギルドからの信頼も厚いしね」

「そ、そうか……」

お咎めなんか無かった……やはりこの世界は命が軽い。地球では……少なくとも日本ではどんな理由であれ命を奪うのは最大の禁忌であった。一般人の中には普段から食べられている食用の動物が殺されるとこを見るだけで、嫌悪を抱く者は少なくない。

しかし外に出れば危険が待ち構えるこの世界は死が身近にある為、命に対する価値観も違うのだ。だから、Bランクに上がる為に襲いもするし、襲われる方も容赦なく殺すのだろう。

依頼をするのは、本当に信頼のおける奴としか受けないほうがいいな。

「さて、積もる話もあるけどそろそろ出発しようか！四日もあるんだし話の続きはゆっくり馬車の中でしょう」

そう言って案内されて、馬車は大きかった。大の大人が3人横になっても有り余る広さの屋根付きの馬車、そして何より馬車を引く一頭の馬がデカい。

普通の馬よりも数倍の大きい漆黒の馬であり、足が6本あった。

『スレイプニール　C　』

というのがこの馬の種族名であるようだ。

「ふふーん。ボクの自慢の馬車と愛馬、ミスレイだよ！！すごいでしょ！！」

腰に手を当て、ドヤ顔するアーニィであるが、したい気持ちも分かる。これだけの馬車と馬を持っているのだ自慢したくなるのも理解できる。

「よろしくな。ミスレイ」

ミスレイの首の辺りをゆっくりと撫でると気持ちよさそうに目を細め、俺に顔を擦りつけてきた。レナも同様に撫でたが、俺と同じ様に懐かれていた。人懐っこい種であるようだ。

「ふむふむ。ミスレイが心を開いたってことはやっぱ2人は信用出来そうだね」

「そうなのか？」

「そうなの！ミスレイは人の悪意とかそういう物に敏感だから、そういう人には触らせないし、馬車に乗せたがらないんだよ！」

その言葉に頷くかのように嘶くミスレイ。俺が思っている以上にスレイプニールという種は頭が良いようだ。

「さあ、出発だよ。乗って乗って！！」

荷物を詰め込み、馬車へと乗り込む。

「出発ー！！」

アーニィ掛け声により、旅が始まりを告げ、馬車がゆっくりと動き出した。

「――――なるほど。大変だったんだね」

出発してから、早数時間が経った。特に問題も無く快適に過ごしている。今はレナと俺の関係を話していた所だ。エルフのことなど喋ってはならない事を抜かしての説明ではあるが……

「でも羨ましいな。竜王クーデリア様にあったんでしょ？一国の王ですら面会は難しいというのにさー」

レナも様付けしていたし、あのロリっ子はこの世界ではかなり敬われているようだ。というよりは竜種自体が敬われていると言ったほうが相応しいか。

「『すべての死者を統べる者』に襲われれば、会えるんじゃないか？まあ生き延びれればの話だけどな」

「それは遠慮したいね。できれば安全な形でお会いしたいよ」

「そりゃそうだな。前から気になってたんだが、なんで裏切られてんのに、懲りずに仲間を募集してるんだ？」

裏切られる殺される危険性があるのに、何故仲間を募集するのだろうか？そのメリットは一体何なのであろうか。

「んー、一番は依頼の成功の為だね。1人じゃ不測の事態に陥った時に対応できない可能性があるからね。それに信頼できる仲間を見つけたいってのもあるね。裏切りに対してはボクが気を付ければいいだけだし」

「大変だなー」

Bランクで、1人で動く冒険者しかも女である。俺が想像できないような苦労をして来たのだろう……

「もう慣れたけどね。ていうかキミ達も気を付けなよ。油断すると後ろから刺されるよー」

「そんなにBランクは襲われやすいのか？街中では襲われなかったが……」

街中ではまったくそういう殺意みたいのも感じなかったし、寝込みを襲われるような事もなかった。アーニィの件があったから警戒していたのに、拍子抜けしたのを覚えている。

「Bランクの種族じゃなくて冒険者のBランクって言ったほうがいいかな。冒険者のBランクが一番、狙いやすいからね」

「なんで冒険者が一番なんだ？街でもどこでも襲おうと思えば襲えるじゃないか」

「街なんかで襲ったら捕まっちゃうし、冒険者なら一緒に依頼受けて、不意打ちで殺してもモンスターに殺されたって言えばそれで済むからね」

なるほど、いい訳が付く冒険者が狙い目ということか。冒険者になったの失敗だったのかもしれん……

「だから冒険者でBランクになった人は大抵国に雇われたり、商人の専属護衛になるから、冒険者でBランク以上の人は少ないから余計に狙われるんだよねー」

「ふむ。じゃあ仲間を組むなら、同ランクの奴のが良いのか……」
下だと狙われるし、上のランクだと警戒される可能性があるということか。
「そういうこと。だから今回はボクは何時もより気楽だよ。キミ達が裏切らなさそうだし依頼は楽に熟せそうだしさー」
「そりゃお互い様だな。俺達も面識もあるし、冒険のイロハを教えて貰ってるからな」
「フフッ、そうだね。改めてよろしくねヴァン」
「ああ、こちらこそ」
意気投合した俺達と「凄いです！！」と意外にもミスレイの背の上ではしゃぐレナを乗せ馬車はゆっくりと街道を進んで行った。
それから三日経ち、目的の森に一番近い村へと辿り着いた。
「これは酷いな……」
「ええ……」
この村がトロルに襲われギルドに依頼出したのだが、想像以上の惨状だった……
村を囲む柵も無残に壊され、家々が大きい何かを叩きつけられたかの様に破壊されていた。石畳や家の壁には血がこびり付いている……

村の修復をしている住人達には生気という物が感じられない。トロルに脅え、更に柵が壊れたことにより他の魔物からの襲撃にも脅え、精根尽き果てているのだろう。

アーニィが作業をしている男に話しかける。

「ねえ、ボク達は依頼を受けて此処に来たんだけど……ここの責任者の所に案内してくれないかな？」

「冒険者の方ですか！！はい！！直ぐご案内させて頂きます！！」

アーニィの名乗りを聞いた瞬間、まるで救世主が現れたかのように喜びを露わにし、直ぐに案内を始めた。この村の住人にとって俺らは救世主の様ではなく、救世主その物かもしれない。

「ヴァン。この村には村を守る為に既に数人のCランクの冒険者が送られてたはずなんだ。それが居なく、村もこの惨状これは、ちょっと厄介かもしれないよ……」

俺達の初めての依頼は波乱が待ち構えているようである……

## 第11話（後書き）

小説を書き始めて、自分の文章力の無さと他の書き手さん達のうまさがよく分かる。

羨ましい、（、д、#）ノ　ムキー！！

# 第12話

「お待ちしておりましたっ！！私がこの村の長をやっていますビレと申します」

出迎えた村長は、頬がこけておりかなりの疲労が窺える。

「さっそくだけど、今の現状を教えて欲しいんだけど」

「はい。トロルを見つけたのは8日前、森に薬草を採りに行った者が偶然見つけたのが事の始まりでした。私達はその日直ぐにアルヴァスのギルドに人を出しました」

「うん。そこまではボクも知っているね。その報告を受けて5人の冒険者を送ったんだよね。トロルを倒すことは出来なくても、追い返す事が出来るぐらいの実力は持っていたはずなんだけど……」

トロルを倒せる冒険者や兵がこのアルヴァス街には数人しかおらず、しかもアーニィも含めすべて出張らっていた為、戻ってくる間に村を守る冒険者を派遣していたのだ。

「襲われたのは3日前の事でした。トロルは数十のオーガを引き連れて来たのです……私達村人も協力して応戦しましたが、力の差は大きく……」

「進化種のトロルか。完全なボク達の読み違いだね……」

「その通りです。私達も余所から流れてきたトロルだと思っていました……」

進化種が厄介なのは、普通のトロルより強い事に加え、その時いた集落の種族を引き連れている可能性が高いのである。他の集落の者を引き連れることは無いが、仲間が居るというのは厄介なのである。

「事情は分かった。次に村の状況を説明して欲しい。女性は無事なのかい？」

「はい。月人族の魔法をかけて頂いた避難用の建物がありますのでそこに避難していますが、先日の襲撃で結界のダメージが大きく耐えれてあと一回というところです」

何故、女性の心配をしたか、それはか弱いから心配しているのではなく、繁殖用に連れて行かれると厄介だからである。

Bランクの相手が増えるのだけは、何が何でも避けなければならない。この周辺には、Bランクの者がほとんど居ないのだ。増殖されると、他の街からBランクの者を呼び寄せる前に、この村だけではなくアルヴァスを含む近隣付近に大きな被害が出る可能性が大きくなる。

「戦える者は私を含め十数名ですが、ほとんどDランクですので……」

「なるほど。じゃあ――――」

村長とアーニィで対策の話し合いが進んで行く。

村の防衛に関しては、アーニィ達に任せていいだろう。アーニィ達の話を聞くかぎりでは、この村は約２００人の小さな村で、戦力に

入れられる男の数は５０人以上いたが先日の戦闘により、過半数が死亡、負傷で戦えない。

逃げようにも逃げてる最中に襲われたら一溜りもないので無理。と結構絶望的な状況であるが、個人的にトロル以外はどうとでもなると思っている。三人居ればオーガ数十程度だったら負けないのだが、トロルの強さが未知数なのが不安要素である。

「――じゃあそういうことで」

俺が考えにふけっている間に、どうやら話し合いは終わったようだ。

「結局どういう作戦で行くんだ？」

「総力戦だね。ボク達が前衛で、村の人達はボク達が倒しきれず抜けられたオーガの相手する形で行く」

「なるほど。単純明快でいいな」

「そういうわけで、トロルはいつ襲ってくるか分からないからいつでも戦える準備はしておいてね。じゃ解散ー」

各自準備を整えることになったのだが、アーニィは村長たちと柵の構築の指揮をし、レナは負傷した村人の手当てに向かって行った。

んで、俺は何をしているかというと、罠の構築である。

真正面から戦うなど愚の骨頂である。要は勝てばいいのである。

罠を仕掛ける場所は、相手が森から出てくるのは分かっているので、

何処に仕掛ければいいのかは分かる。

仕掛ける罠は、以前もやった足かけの罠である。地面に木を打ち込み、木と木に黒く塗ったロープを巻く簡単なお仕事である。夜に襲ってきたらしいので、トロルはともかく、オーガはあまり夜目が効かないので間違いなくかかるだろう。

元オーガの俺が言うんだから間違いない。さらに掛かったオーガに油をぶっかけて燃やそうっていう作戦である。

先ほどの会話で気になった月人族という種族は妖精族で、エルフと双璧を張る魔法の使い手のあり、エルフとは違い隠れ住むような事はしていないらしい。

偶然この村に立ち寄った月人族に頼んで魔法をかけて貰ったらしいが、建物に何か障壁があるわけではなく、建物に魔法陣のようなものを書き込み、それに魔力を通して、建物そのものを頑丈にしたらしい。

村を巡り油をかき集め、準備を終える頃にはもう日が暮れていた。

もう完全に日も落ち、辺りは真っ暗になり、明かりは村の松明の明かりのみであるが、それも襲撃を防ぐために最小限の火しか灯していないので辺りは薄暗い。その薄暗さが余計に、不気味さを醸し出している様に思える。

現在、数人の村人と俺が見張りをしている。ゴブリンから進化した俺は夜目が効くため見張りには最適なのだ。

それから更に数時間が経ち、今日は襲撃は無いと思った矢先、トロ

ル達はやってきた。

まず気付いたのは俺であった。暗くまだ視界には映っていないが、何か数多くのモノが動く音を聞き取った。

「鐘を鳴らせ！明かりも付けろ！来るぞ！！」

その言葉に慌てて、村人は鐘を鳴らし、火をつけ辺りを照らす。鐘を音を聞き直ぐに全員、建物から姿を現した。直ぐに出て来たというのに全員既に武装を終えていた。恐らく全員緊張で眠れなかったのだろう。

「来ましたか……」

緊張の面持ちのレナが隣に立つ。今は胸当てと肩当てを装備し、服に穴をあけ、羽と尻尾を出しいつでも戦える状態である。

「ああ。今さらだが、レナお前は無理に付き合う必要はないぞ？お前は世界を見て回りたいんだろう。こんな所で俺に付き合う必要はないぞ」

本当に今さらな話である。本当はトロル一匹を三人で倒す比較的安全な依頼だったから連れてきたが、こんな危険だと知っていたら連れてはこなかった。

レナにはレナの夢がある。それを俺に付き合わせて台無しにするわけにはいかないのだ……

「何処までも付き合います。私は貴方と世界を見て回り、貴方を誰よりも傍で貴方を見続けていたいんです！」

ああ……なんと嬉しい事を言ってくれるのだろうか。今がこんな場面で無ければ抱きしめ、押し倒している所だ。

「ありがとう。さっさと終わらせて、館に帰ろう。レナ、アーニィ、先に行く！罠に掛かったら来い！！」

「はい！！」

「わかった！！」

村を飛び出していく。トロル達の音を聞く限りでは、罠のある方へちゃんと向かって来ているようである。

罠の傍に隠れ、トロル達が来るのを待つ。そして程なくしてトロル達が現れた。

「でけぇ……」

トロルは、オーガより一回り大きい３ｍ前後と聞いていたが、それよりデカい４ｍ以上はあるかもしれない。前身は赤黒く、腕は木の幹より太い。手に持っている武器は棍棒……と言いたいが木その物であった。

枝を全て落とした木を武器にし、それを軽々肩に担ぎ、オーガと此方に向かって走ってきている。

「これ……まずい！？」

そして更に予想外な事が続く。トロルが先陣を切って此方に向かっ

て来ているのだ。兎人を襲ったオーガをイメージしていて、下っ端が先で、トロルは一番最後から襲ってくるとばかりと思っていたのだ。

その為、罠はオーガが掛かることしか考えていなかったのだ。あの巨体に突っ込まれたら、間違いなく罠は壊され機能しないだろう。

「クソッ！どうする……」

だが迷ってる暇は無い。俺は油の入った木の樽を持ち、近づいてくるトロルに、向かって投げつけた。

「ぐぉ！？」

樽が当たり怯んだ隙に、更に油を吸わした布を巻きつけた石に、発火の魔法で火を点けトロルに投げつける。

「ぐがあああああああああ！？」

油まみれになったトロルが勢い良く燃え上がり、周りのオーガも事態が飲み込めずアタフタしている。

「案外、呆気無かったな」

後は、トロルが焼け死ぬを待つのみである。死んだら後はオーガを倒すだけのお仕事である。

予想外の事が、予想外にいい方向に進んだようだ。

「がああああああああああああ」

燃え暴れているトロルが不意に一体のオーガを掴み、持ち上げた。

「ぐおっ？」

そして、その持ち上げたオーガの頭を……もぎ取った……

「おいおい。嘘だろ……」

首から噴出す血をシャワーのように体に浴び、火を消火し始めたのだ。そして一体、二体とオーガの首を毟り取り、完全に消化してしまった。

「グガアアアアアアアアアアアアアア！！」

トロルが叫ぶ。先ほどとは違い、怒りの咆哮である。

「ヴァン！成果は！？」

火の手を見て村から出てきたアーニィとレナがやって来た。

「失敗だ。トロルにちょっと手傷負わせただけだ……」

「そうか、残念だね……ってトロルでかっ！？」

「お〝前ら、お〝んなつがまえろ。おでは、あいづ殺す！！」

怒り狂いオーガに叫ぶように指示を出す。どうやら俺の相手はトロルになりそうだ。

しかしそれは好都合だ。下手にオーガとの乱戦状態でトロルを相手にするより、トロル一体に集中出来るほうが戦いやすい。

「さて、俺をご指名の様だ。二人ともそっちは頼んだ」

「ああ。任せて！！」

「絶対勝って下さいね！」

レナとアーニィがオーガの群れに向かって行く。

さあこちらも始めようか！！

「さあ、こっちに来いよ木偶の坊！ぶっ殺してやるぜ！！」

まずは挑発し、オーガ達が邪魔しに来ない様に少し離れた位置にトロルをおびき寄せる。

瞳に怒りと殺意を宿したトロルが俺に向かって突っ込んできた。意外にもその速度は速い。俺に一気に接近し、木を振り回す。

「うおっ！？」

横薙ぎに振られる攻撃をしゃがんで避ける。轟音と共に頭上を通り過ぎる。避けたと安心し身を起こしかけたら、まるで振り子のように攻撃が飛んで来た。

一旦距離を取る。すると、トロルがすぐさま接近しまた横薙ぎに木を振るう。それを俺が避けまた距離を取る。またトロルが接近し木を振るう。

それの繰り替えしを何度も繰り返す。横薙ぎで来てくれるので、ジャンプやしゃがみで避けられるが接近が出来ない。

木を振り下ろしてくれれば接近も出来るし、地面にぶち当たれば木も折れるのだが、それを分かっているのかその攻撃が来ない。

小鬼の特性は兎人と同じ俊敏である。高速で移動し相手を翻弄しながら戦うのが小鬼のセオリーであるらしいが、こうリーチの差があるとスピードがあっても意味がない。

一瞬の隙が欲しい。この兎人を上回るスピードがあればその一瞬の隙に肉薄出来るだろう。そして、引き継いだオーガの力でこの斧を叩きつければ勝てる。

「アッー！！あそこで女がオーガに犯されてる！！」

とトロルの後ろを指さしてみたが、返って来たのは攻撃であった。やはりこれに引っ掛かる程馬鹿ではないらしい……

その攻撃をしゃがんで避ける。するとある物が目に入った。

（これ使えんじゃね！？）

それがある方に、攻撃を避けつつトロルをおびき寄せる。オーガが居るほうに近づいてしまうが仕方がない。

（さあ来い！あと一歩踏み出せ！！）

そしてその願いが届き、俺に攻撃するために踏み出した足に、不発

であった罠のロープが掛かる。

「グオッ！？」

走って来る巨体には耐えられないが、踏み出した程度なら十分耐えきれるのだ。

トロルは転びはしなかったが、大きく体制を崩しながら俺に攻撃を仕掛けてきた。

それを避ける。体制を崩しているため、追撃はこない。その隙に数メートルの距離をほぼ一瞬で移動し、トロルの足に渾身の一撃を放つ。

「ぐぎゃあああああ！！」

小鬼の俊敏によって加速された斧は、トロルの足を両断する。片足を失いバランスを崩したトロルは地面に倒れる。

そして俺は、トロルが起き上がる前に頭の方に移動し、斧を振り下ろした。

肉が切れる音と共に、苦痛に満ちたトロルの頭がゴロリと転がり、起き上がろうとしていた体は地面に力なく倒れた。

トロルが死んだことを確信した俺は、その場に崩れる様に座り込む。

（怖かった……）

安心した所為か、胸の動悸が激しくなり体から汗が噴き出てくる。

明確な殺意を持つ者と真正面から戦うのは初めてだったのだ。『すべての死者を統べる者』程の圧倒的恐怖感ではないが、相手から向けられる殺意、一歩間違えれば自分が死ぬ状況というのは、かなりの恐怖であった。

馬車の移動中にレナと一緒に自分の進化した体の確認をしておいて良かった。自分の体を把握していなかったらとても勝てなかった。

今の戦いで分かったが、俊敏というのは移動速度だけではなく、体の全体の動きが早くなるようである。斧の振るスピードも上がっていた。

本来、小鬼は力が弱くナイフや小刀を武器を得意とするらしいが、オーガの力を持つ俺は重い武器も持つことが出来、高速で扱えるこの体はかなり強いんじゃないかと感じる。

さて、ずっと休んでいる訳にはいかない。レナ達の援護に行こうとそちらを見たが、もう勝負が付きそうであった。

数十いたオーガはもう数匹しか残って居なかった。それもレナ達があっという間に倒してしまった。

「おう、お疲れさん」

「そっちも終わったんだね」

「お疲れ様です。無事で良かった……」

嬉しそうに、此方に笑みを向けるレナ。

「ああ、レナも無事で良かった」

やはりレナはかわいいな、多少の返り血程度ではレナの美しさは損なわれないな。うん。

「はいはい。そこで二人の世界に入らない！さあ帰るよ！」

パンパンと手を叩き、俺の意識を現実に戻す。

「ん？、ああ、分かった。倒した証とかで頭とか持ち帰った方がいいのか？」

「そうだね。死体を見れた方が、村の人も安心するだろうしね」

「了解ー」

苦悶に満ちた表情のトロルの頭を持つ。自分でぶった切っておいてなんだが、気持ち悪いことこの上ない。

「さあ帰るか！」

こうして、俺達の初めての依頼は終わりを告げた。

## 第１２話（後書き）

私にまともな戦闘シーンなんて書けなかったんだ（´・ω・`）；・・・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4826w/

俺の成り上がり記

2011年11月4日00時08分発行